
あなたの虜

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの虜

【Nコード】

N8893Z

【作者名】

流星群

【あらすじ】

借金取りから窮地を救ってくれた金髪碧眼男は異世界の王子様でした。このまま異世界に拉致られてはたまりません。堅実をモットーとする小鞠は王子様を異世界に追いつ返すことができるのか。ムーンからのお引越しです。

1 (前書き)

お引越しをご理解くださった皆様。
本当にありがとうございます。

そんなことはテレビドラマの中だけだと思っていた。
ただど現実らしい。

「佐原小鞠さん。死んだ母親の残した借金1000万、きみが払ってくれるんだよねえ？」

一昔前のチンピラ風な風貌ではなく眼鏡にスーツ。

インテリ青年実業家みたい、と小鞠は男を見てそんなことを思う。
だけど口調がなつてない。

死んだ、ではなくそこは亡くなったというべきだ。

払ってくれるんだよねえ、ではなく、払っていただけますよね、とかなんとか言うのと良かった。

これでは外見だけ繕ったおバカさんに見える。

「なんでわたしが払わなきゃいけないんですか？男と蒸発した母とはもう2年も会ってませんし、死んだのだってもう一ヶ月も前でお葬式も何もかもすんじゃったんですよ。来るならもつと早く来るもんじゃないですか、借金取りつて。はつきり言って胡散臭いことこの上ないんですけど本当に母が借金してたんですか？」

築25年のマンションのリビングに一見インテリだが、あつち系のやばい人と対峙している。

なのにやばい人相手にどうしてこんなことが言えたのか小鞠にも不思議だった。

突然ふつてわいた借金話に頭がついていってないんだ、きつと。

男の舎弟、もとい部下らしきチンピラ、もとい平社員が生意気な態度に気色ばんだが彼女は怯むこともない。

「へえ、なかなか肝の据わった姉ちゃ 娘さんだ」

うっかりボロが出てるぞと小鞠は内心突っ込む。

誰が姉ちゃんだ。

ここは飲み屋じゃないっての。

どこのオッサンよ、と胸中で悪態をついていると、男はスーツから一枚の紙を取り出して小鞠に見せた。

紙には「借用書」とある。

内容を目で追っていた彼女は最後の連帯保証人に自分の名前があったことで目を見開いた。

「はあ！？なんでここにわたしの名前があるのよっ。って言うかこれわたしの字」

「おや、自分で書いたって認めたね。綺麗な字だ。書道でも習ってたかい？」

小鞠は借用書の日付を確認し、それが2年前の母が蒸発する前の日だとわかって、閃くように思い出した。

『小鞠ちゃん、ここに署名してほしいんだけどいい？お客さんに増税反対の署名運動に名前書いてって頼まれたのぉ。ね、お・ね・が・い』

父が病気で亡くなってから生命保険を食いつぶして生活していたが、いつかは尽きるとわかっていた。

そのため専業主婦だったはずの母親は水商売に飛び込んだのだ。

一番手っ取り早く金が稼げると。

元来寂しがり屋の母はそこでいろんな男に入れあげ、そして最終的には男と蒸発してしまった。

それが小鞠の20歳の時だ。

もう成人したから一人でも平気だと思ったのだろうか。

それから2年音信不通で、やっと連絡が来たと思ったら警察からだった。

雨の日にトラックと正面衝突して同乗していた男と一緒に死んだらしい。

母の亡骸を見ても涙も出なかった。

ただ死んだのかと他人事のように思っていた。

自分の娘を見捨てて男と楽しく暮らしていた人に同情もない。

そして怒りも憎しみももうない。

はずだったが、小鞠はたったいま思い出した過去にメラッと怒りが湧き上がるのを感じた。

（あれかあ！やけに分厚い署名用紙だと思ってたけど二重になってたんだっ）

2枚綴りの伝票や書類のように1枚目に署名すれば、残りの2枚目にも文字がうつるようになっていたのだろう。

1枚目はちゃんと増税反対の署名用紙だったため油断した。

くっそう手の込んだことをと齒軋りしたい思いで、小鞠は男の持つ借用書を奪い取ろうと試みた。

けれど男がひよいとそれを持ち上げ懐にしまう。

「さて、署名がきみのものだとは判明した以上、金は払ってもらわな
いといけないねえ」

「お金なんてないわよっ」

「大学4回生のきみは奨学金をもらってる苦学生ではないようだけ
ど？それにこんな広いマンションに一人暮らした。いいご身分だね
え」

「返済義務のない奨学金を狙ったけど駄目だったの。奨学金って言う借金を背負うより父の残り少ない保険金で大学に行くことにしただけよ。このマンションだって父が遺してくれたものよ。母が亡くなつて相続税とかかかったしおかげでもうすっからかん。来年から社会人だしその給料で生活費やこの管理費なんかをなんとかまかなえるかなつて思つてるところなの。まさかここを売れとか言うたぶん二束三文で1000万なんて大金に替わることはないと思うけど」

「ま、でも借金の足しにはなる。猶予は10日あげようか。すぐ引越してもらおう」
決定事項かと小鞠が相手を睨みつけたところでいきなり第三者の声が割って入った。

「借金？わたしの后となる女性がそのような苦しい立場にあったとは。その借金はすぐにわたしが支払おう」

リビングのドアを開けて廊下から現れたのは金髪碧眼の男だった。その後に茶髪の男が二人続く。
あんぐりと口を開けたのは小鞠だけではない。
目の前の男と舎弟も同じだった。
見た目がばりばり外国人の男が流暢な日本語を話しているのは全くもって違和感がある。
いや、それ以上に違和感があるのは彼らの服だ。

特に金髪碧眼男。

それはなんのコスプレですかといいたくなるような、きらっきららの衣装を着ている。

たとえるならそう、あれだ。

マリリアントワネットなどが出てくる映画の衣装。

靴がブーツであったり剣を携えていたりするし、デザインに少しフアンタジー要素も加わっているようだが、中世とか近世の貴族様と表現するにぴったりだ。

誰、と言いかけた小鞠だったがはたと気がついた。

(え？ブーツ？ってこの人たち土足)

金髪碧眼の男が小鞠に向かって微笑んだ。

笑顔もキラキラだなあ、とどうでもいいことを思いながら、彼女は室内に響く男の艶やかな声をまた聞いた。

「で、姫。1000万とはいかほどのことですか？あにく持ち合わせはそうありません。おい、その無礼者。これで1000万とやりに足りるのか？」

金髪男が背後に控える深緑の目をした男に目配せをすると、付き人のようにしたがっていた男は懐から包みを取り出し広げた。そこには金貨がたんまり入っている。

「ちよ、あんちゃん。その妙な服装といいこの金貨といい。どこの仮装パーティーの帰りだい？こんな偽物の金貨で俺たちが納得するわけ」

「誰が偽物など渡すか。カッレラ王国第13代次期国王シモン・エルヴァステイを愚弄するか、この悪党どもが。我が国の金貨は他国のように混ぜ物などせず純金でできている。ゆえに世界でも我が国の金貨は価値が高いのだ」

へえ王子様。

まさに型にはめたようだ和小鞠は男を観察した。

濃い金色の髪はそこにある金貨のごとく色で光を受けるとピカピカ。青い目はサファイアですかと言いたくなるくらいの綺麗な深い青をしている。

キリとした眉は男らしく、鼻筋は通って唇は厚くもなく薄くもなく形がいい。

（もうこれ、どこのスター様ですかっくらいかっこいいんですけどお）

後ろの二人もそれぞれ整った顔立ちで、いつからここはハリウッドスターが訪れる家になりましたと自問する。

いやハリウッドスターに知り合いはいないし、そもそも英会話もできないからね。

などと余計なことを考えて現実逃避してしまうのは小鞠の悪い癖だ。

「これではまだ足りないか。ではこれもつけよう。鞘を飾る宝石は本物だ。実践用なので装飾は最小限だが質のいい宝石を使っている。テディ、オロフ。おまえたちも剣を渡せ」

「シモン様、丸腰ではシモン様をお守りすることができません」

「良い、オロフ。姫の憂いを払うことが最優先だ」

テーブルの金貨の横に男たちが剣を並べる。

シモンと呼ばれた王子の剣が一番高価そうだ。

実践用というわりに鞘にはめ込まれた宝石はかなり大きい。

他の二人の剣はそれに比べると宝石もはめ込まれているわけではなくかなり見劣りするが使い込まれた感があった。

小鞠が目の前のチンピラ男と舎弟を見つめると呆然としている。

自分もこんな顔してるんだろつなあとぼんやり思う。

だがそんな男二人に痺れを切らしたのかシモンと言われた王子様は、なんちゃってインテリ風眼鏡男の座るソファをブーツでぐりぐりと踏みつけた。

えつと、それうちのソファなんですが。

「1000万とやらにはこれで充分だろう。さっさと換金所にも行ってこの世界の通貨に替えてくるが良い」

言って男のスーツから借用書を取るとビリリと盛大に破いてくれた。ブラボー、シモン様。

これで晴れて自由の身と小鞠は内心ガッツポーズを取る。

「まだ居座るつもりなら交渉は決裂、この場で斬って捨てるがどうだ？」

美形が凄むと恐ろしいのだなと小鞠はこのとき初めて知った。

やばい人たちは自分たちよりやばい人の出現に泡を食って早々に退散してくれた。

もちろん金貨と剣は持っていくのだからちゃっかり、もといしつかり仕事をしている。

「姫、お初にお目にかかります。わたしはカツレラ王国第13代次期国王シモン・エルヴァステイと申します」

王子様は何事もなかったように笑顔を浮かべ礼儀正しく自己紹介した。

ついでに従者二人も紹介してくれた。

茶髪で緑の瞳をしたのがティ・ユーセラ。

そして同じ茶色でも少し濃い髪色をして、ヘーゼルナッツ色の瞳をしたのがオロフ・ヒルヴィ。

「テディはシモン王子の側近で仕事の補佐なんかもするらしい。オロフは近衛騎士団の団員ということだった。」

「座っても」とさつきまでチンピラが座っていたソファを指され、小鞠が頷くと彼はゆったりと腰を降ろす。

「うわぁ、足長いなぁ。」

「そんな彼の後ろに従者二人が控えて立った。」

「SPだ。SPがここにいる。」

「これもうどつきりですとか言われたほうが納得するんですけど。」

「名前はさつきも伺いました。ただわたし、カッレラ王国なんて知らないんですが。国はどこにあるのですか？金髪碧眼なんて北欧とかあつちの人？」

「いえ異世界ですよ、姫」

「なんだかさつきから普通に「姫」とか言われてるけどやめてくれな
いかなぁ。」

「ガラじゃないし。」

「それにしても異世界なんて場所どこにあつたっけ。」

「つらつら考えていた小鞠は「ん」と思考が停止した。」

「異世界ってこことは違う世界ってことですか？アニメやラノベでよくある魔法や剣やドラゴンが出てきて、こつちの世界の人が召喚されて魔王やら悪魔を倒せとか、理不尽に迫ってくるっていう」

「アニメやラノベ……はわかりませんが、ドラゴンはもう絶滅しましたし魔王や悪魔はおりません。魔法使いは城におりますよ。姫が会いたいのであれば城に戻ったらすぐに場を設けましょう」

「場を設けるってわたしやっぱり異世界に拉致られるんですか」

「拉致だなんてとんでもない。あなたはわたしの后となるべく方です。丁重にお迎えする所存です」

またしても小鞠の思考がとまる。

「后」と聞こえましたが気のせいですか。

そういやさつきも聞こえたな。

いやいや、聞き間違えたかもしれないじゃないかと小鞠は質問する。

「后って、あなたの世界では異世界から花嫁を拉致するんですか？」

「いいえ、このようなケースは稀です。姫はご存知ではありませんか。生涯の伴侶を魂の片割れと言ったりするでしょう」

「えーっと運命の赤い糸とか自分の半身とかそういう？」

愛至上主義みなたいな人が喜びそうな話だ。

小鞠はそれほど恋愛体質ではないためよくわからないが、そこまで一人の人を想えるのはすごいと単純に思う。

シモンは小鞠の言葉に頷く。

「カツレラ王国の王族は代々その魂の片割れを見つける能力に長けているのです。そしてわたしの相手が姫、あなたです」

「いやあなたって言われてもそんな直感で相手を選ぶような話を、

はいそうですねって信じるわけ」

「直感ではありません。愛魂が片割れを呼ぶのです」

「アイコン？」

パソコンのアイコンとは違いますよね、という質問はなんとか飲み込んだ。

「魂魄の愛を司る部分です。誰もが持っていますがわたしたち王族はこれを取り出すことができます。ほらこのように」

シモンが胸に手を当てゆっくりと離すと、そこに日の光を反射する水面のような輝きが現れた。

ゆらゆらと彼の掌で青く揺らめくのが綺麗だ。

その光が形を崩して小鞠に向かって流れていきそうになったところで、シモンは手を振ってその輝きを消した。

「愛魂の導きであなたを見つけました。姫、どうかわたしの后になつてください」

「いや、無理です」

「すげなく即答する小鞠にシモンより背後に控えた従者の方が驚きの表情になった。」

「平民がシモン様の求愛を断った？」

「次期王妃ともなればこのような質素な部屋で暮らさずとも贅沢三昧だというのに」

「こら、聞こえてるから従者君たち。」

「質素で悪かったな。」

「あんたたちの言う平民はこれが普通なの。」

「つていうか今の時代、家賃の要らない家があるだけいい方なんだから。」

「ムっと小鞠は表情を険しくすると、そんな彼女の様子に気づいたらしいシモンが従者へ鋭い一瞥をくれた。」

「姫を愚弄するか？おまえたちといえど容赦はしないが？」

「シモンの言葉に二人は控えるように口を噤む。」

「失礼しました、姫。いろいろ質問はあるのですがまず最初に、あなたの名前を教えてくださいませんか？」

「小鞠……佐原小鞠です。質問ってあなたの求愛を断る理由でしよう？そんなの決まっています。異世界なんて行きたくありません。わたしは堅実をモットーに生きてるんです。父が亡くなってホステスになった母は、男をとつかえひつかえにするただれた生活を送っていました。それを見て育ったからか安定を好むようになりまして、えー、ですからはつきり言っただけからか安定を好むわけのわからないところ無理です。堅実や安定からかけ離れていますし、人間これまで生き

てきた階級で生きるのがいんです。そちらの従者さんは王妃になれば贅沢三昧とおっしゃっていましたが、身の丈に合わない贅沢は人を墮落させるか破滅させるか……どの道ろくなことにならないんですよ。わたし、これでも来年からの就職先が決まっていますです。わたし、それでも数年働いて適齢期に結婚、もしくは、お局と呼ばれてもバリバリ男社会で働いて上を目指すか、っていう選択で迷っているところです。お局は独り身を貫く覚悟を固めなければいけません。お局はそこは社会に出て自分の実力を試してから見極めよう」と

一人話をしていた小鞠はシモンたちが眉を寄せているのに気づいた。あれ、こっちの社会制度理解できなかったかな、やっぱり。コホンと軽く咳払いをして彼女はシモンへ目を向けた。

「つまり要点だけ申し上げますとですね。堅実安定とおさらばして異世界で知りもしないあなたのお后様なんてなりたくありません、ということですよ。おひきとりください」

「ふむ、コマリ姫のおっしゃることも最もだ。確かにわたしという人間を知ってもらおうほうが先決か。ではコマリ姫、こういたしましたよう。しばらくわたしをこちらにおいてください」

「はあ、なんで!?!」

ついで地が出てしまったがもうかまってなどいられない。

どうして自分が得体の知れない、しかも異世界人の男を家におかなきゃならないの。

「コマリ姫はわたしを知らないとおっしゃったじゃないですか。では知っていたかどうかとそれからわたしの后になるかどうかの判断をしていただきたい」

「だから異世界には行きたくないんだってば。諦めて帰ってよ」

「やっと見つけた愛魂の対となる女性を諦めたくはありません」

「あなたの好みはないんですか。その愛魂ってのが選べばなんでもいいんですか?」

「外見や性格のことですか?愛魂が呼び合う相手とは相性がいいのです。そこは心配ありません。それにコマリ姫のお姿は可愛いんですよ。そこまで見事な黒髪ははじめてみました。瞳も限りなく黒に近くてつばらで。わたしたちとは違って少し黄色がかった肌の色も美しい。まるで真珠のようだ。きっとその肌や髪ならどんなドレスも映えるでしょうね」

うっとりとし小鞠を見つめて言うシモンに、彼女は思わず自身を抱きしめるようにして身を引いた。

良かったいま秋で。

夏の薄着の季節だったらどんな目で見られてたんだろう。

小鞠の警戒心のこもった様子にシモンはにっこりと笑った。

「ご安心ください、コマリ姫。無理やりなどそんな男の風上にも置けないような真似はいたしません。あなたの気持ちがわたしに向くのを待ちます」

だーかーらー話を聞けえ！、と小鞠は叫びたくなった。気持ちもなにも異世界に帰ってくれと言ってるのに。

シモンが腰を浮かしてテーブルを回りこみ小鞠の座るソファの前に跪いた。

彼女の手を取りその甲にキスする仕草をとる。

「予感がします、コマリ姫。わたしはきつとあなたの虜となるでしょう。そしてわたしを知ったあなたもそうなることを願います」

微笑むシモンに小鞠は引きつった顔で手を振りほどいた。

(この人の笑顔って心臓に悪い)

どつくんどつくん脈うつ胸を押さえ小鞠は再度帰ってもらおう言ってみた。

しかしまたしても却下されてしまった。

そこへピピピピと携帯電話のアラームが鳴る。

バイトの時間だとアラームを止めた小鞠は、3人の目が携帯に釘付けになっていることに気づいた。

「コマリ姫、それは？」

「携帯電話。遠くの人と話ができる機械。わたしはこれからバイトなので出かけます。休日は稼ぎ時なんです。で、その間におとなしく異世界へ帰っててください」

異世界から后にお迎えにあがりましたなんて冗談じゃない。

ピバ堅実、安定職業。

誰が異世界なんかに行くもんか。

カバンを手に玄関まで出て行く小鞠の後をシモンははじめ従者がぞろぞろとついてきたため、彼女は背後を振り返った。

おっと、背が高いなあ。

キスするとき首が疲れそう。

一瞬、思ったことは頭の隅に押しやり小鞠はシモンを睨んだ。

「ついてこないで」

「外界は危険かもしれません。バイトとやらへ向かうコマリ姫をお守りせねば」

「いりません。夕方には帰ってきますからおとなしく待っていてください」

あ、違った。

言うべき言葉は帰れだった。

けれど小鞠が言い直すよりも早く、シモンは満面の笑顔になって彼女を腕に抱きしめる。

ぎゃあ、男の風上はどこへいったあ。

「ここにいることを許してくださいさるのか。わかった。姫が望むのならここでおとなしくしていよう」

「姫」ってやめてください。そんなガラじゃないんで」

「ではなんとお呼びすれば？」

「小鞠でいいです」

「コマリ」

ああもう、耳と尻尾が見える気がする。

ちくしょう、ちょっと可愛いじゃないか。

しかも22歳にもなって言うのもなんなんです、男の人に抱きしめられるなんて初めての経験で、これは何とつかすっごく照れる

んですけどお。

硬直していた小鞠は数秒後に我に返り、なんとかシモンの腕から逃れると彼の足元を指差した。

「靴、脱いでください。日本じゃ家の中は靴を脱ぐんです。土足で動き回って汚れたところは掃除しておいてください。それからわたしが留守の間勝手に部屋の外へ出ないこと。そんなおかしな服装でうろついたらおまわりさんに職質されますからね。あと、誰が来ても応答しない。いいですか？」

くどくどと念をおす小鞠にシモンは靴を脱ぎつつ頷いている。他に注意点とか伝えておかなきゃいけないことはなんだっけ。昔読んだライトノベルで逆トリップ物とかあったかな。ともかく文化も何も違うはずだからそこは要注意か。

「用をたすならトイレはそこ。タンク横のレバーを手前に引けば水が流れます。おなががすいたら冷蔵庫から勝手に好きなものを出して食べていてください。えーとそれから、なんだかよくわからないものだったから、という理由で家の物を破壊するのはなしです。しゃべる箱や音のでる箱は機械というんです。高いんです。壊してたら即、異世界に帰ってもらいますからっ！では、………いってきます」
出かけの挨拶にいい言葉が思いつかなくて「いってきます」と言うしかなかった。

「はい、コマリ。気をつけていっておいで」
「につこり笑顔のシモンの背後で従者二人も「いってらっしゃいませ」と軽く頭を下げる。
「うわぁ、なんなのこれ。
なんだかこそばゆいぞ。」

人が家にいるのは2年ぶり。

そしてこんな他愛ない挨拶も2年ぶりだ。

扉を閉めて鍵をかけた小鞠は喝を入れるようにバチンと頬を叩くと、エレベーターに向かって駆けた。

バイト先は亡くなった父の友人が経営する喫茶店だ。
自転車で一駅分の距離。

そこでお客の去ったテーブルを拭きつつ小鞠は窓の外を見つめた。
そろそろ日が傾いている。

忙しく働いていた時は考える余裕もなかったが、客足が落ち着くと
昼間の出来事は夢だったのではないかという気がしてきた。

（異世界から王子様だよ？わたしがお后って変でしょ。ガラじゃな
い。ないないない、ありえない）

ふるふる首を振っているとカウンター奥からマスターの声がした。

「小鞠、表のあれはなんだろうな？コスプレの外人さんが店をのぞ
いてるんだけど、小鞠英語できるか？」

ん、とガラスの扉を振り返った小鞠だが。

「ぎゃあシモンとその従者あ！」

「あら、小鞠ちゃんのお友達？だったら店に入ってもらったらどう
なの？ちようどお客さんも途切れたしコーヒーぐらいサービスする
わよ」

マスターの奥様がニコニコと笑う。

「えー、知り合いつて言うか押しかけつて言うかあ……てか、どう
してこの場所が。あっ、冠奈さん開けちゃだめ」

「もー、意地悪言わないの。小鞠ちゃんの大学の留学生じゃないの
？優しくしなきゃ、メよ」

カラコロとドアベルが鳴って冠奈が扉を引き開けたとたん、シモン
が店内に飛び込んでくると小鞠に抱きついた。

おい、だから男の風上とやらはどこへいったの。

は日本のアニメにハマってて今日はイベントに出てたって言うの。いい?」

「嘘をつけと? キクオがマスターということとはコマリの師だろうに。しかもあの二人はあなたの親代わりなのでは?」

「マスターってそのマスターじゃなくてね。ああもう、いいから言うとおりにして」

青い目を覗き込んで「いいわね」と念を押すと、シモンの頬がほんのり赤くなった。

ちよっと待って、目がうつとりしてきてる気がする。

「ああ。コマリのいいように」

犬か、犬になるのかシモン。

なんだか命じたらそのとおりやってくれちゃいそうな気がするなあ。

小鞠はブルルと首を振る。いけない。

ちよっと自分の中に女王様が見えかけた。

そっちの趣味はないないない、と額を押さえ彼女は「戻ろう」とカウンスターを指差す。

「内緒話はもう終わり? やあねえラブラブ?」

「冠奈さん、なんでも恋愛に話を持っていくのはやめてください」

「ええ? だけどデイ君とオロフ君がシモン様と小鞠様はご結婚なさる運命ですって言ってるけど。なんとか王国第13代次期国王シモン様の王妃が小鞠ちゃんなんでしょう?」

ぎゃあ、ぬかった。

従者二人に口止めしてない。

っていうかおしゃべりめえ。

じろりと小鞠が二人を睨みつけたが彼らはきよとんとしている。

うわぁん、こっちの常識が彼らには通じない！

カウンターからコーヒ―を三つ出しながら菊雄が楽しそうに笑った。

「異世界の13代王子様とかおもしろい設定だ。日本のアニメは外国でも人気らしいし、今はそういう話が流行ってるのか？」

「いえ、マスターキクオ。本当の話です」

シモンが首を振る。

黙れ、シモン。

コマリのいいようにと言った舌の根も乾かんうちに何を言いやがりますか。

思わず小鞠はシモンの頭をはたいていた。

「デイトオロフがぎょっとしたがかまうもんか。」

おおかた王子の頭をぶつ叩く人がいなかったただけだろう。

びっくりしたような顔をしているシモンに、彼女は「黙って」と口

パクで伝えたが、彼は首を傾げる。

「コマリ、何だ？声に出してくれないとわからないのだが」

そこへ店の扉が開いてドアベルが鳴った。

そこで小鞠たちの会話は途切れる。

逆に店の入口から「キャア」と黄色い声が出た。

「いたあ。この辺りで見失ったからどこに消えたかと　あのお、すみません。写真を撮らせてもらってもかまいませんか？あ、日本語通じない？えっとピクチャー……なんだっけ？」

年若い女の子が3人、シモンたちに近づく。
うわ、勇気あるな。

英語もできないのに外国人に話しかけるなんて。
だがそこで小鞠はハツとした。

シモンたちは服装をのぞいても目立つ顔立ちをしている。
この写真がもしどこかの雑誌社とかに送られたら困ったことになる
のではないか。

(異世界人だから国籍不明だし……警察とか出てきたらヤバイい)

小鞠はずいとい女の子たちの間に入って首を振った。

「すみません。この人たち宗教上の関係で写真は駄目だそうです。
魂を抜かれるとかって信じてるらしくって、隠し撮りでも何でも写
真を取られると国では切腹 あ、や、えと絞首刑にされるとかっ
て、厳しい法があるらしいんです」

「えー？マジい、それなんか嘘っぽおい」

「ていうかあなたに聞いてないし」

「実はこの人たちに近づいてほしくないとか？」

やっぱり苦しい言い訳だったかと小鞠が困っていると、背後からに
ゆと手が伸びて次の瞬間、彼女はシモンの腕の中にいた。

「彼女の言うとおりです。我が国の法はとても厳しいのです。です
からシャシンはご勘弁ください。それからわたしと彼女の時間を邪
魔しないでもらいたい」

ちゅ、とシモンが髪にキスしたのが小鞠にもわかった。

冠奈がきゃあと浮かれた声をあげ、菊雄がピクと眉を寄せる。

女の子たちは怯んだように顔を見合わせ店を出て行った。

見事に追っ払ってくれたよね、シモン。
でもえーと、さっさと離してもらえないだろうか。

「コマリ、いい匂いがするな。何の香水？」

「ただのシャンプーとリンスです。っっていうか離して」

「もう少し」

「シモン君とやら。これ以上小鞠にセクハラするならいますぐ店から叩き出すぞ？」

菊雄の声音が低い。

ヒイイ、マスター。

拭いてるカップを割りそうですっつてば。

シモンも菊雄の冷気を感じたらしい。

素早く小鞠から手を離れた。

そしてその夜。

「コマリ、マスターキクオはなにか魔法でも操るのか？」
家路につく道々シモンが小鞠に質問してきた。

彼らの服はこちらのものに変わっていた。

仕事が上がったあと小鞠はともかく着替えてと、3人を近くの大型スーパーに連れて行って、こちらの服を3人分買ったのだ。スーパーでいい。

だってこんなコスプレ外国人連れて電車乗ってショッピングモールとか目指したくない。

それにスーパーの服でも3人分は馬鹿にならないのだ。

おかげで銀行から下ろしたばかりの食費はすべて飛んで、それでも足りなくて新たに数万円下ろした。

それにしてもさすが外国人体系だ。

3人とも足の長さが日本男児のそれじゃない。

長いよ、足。

インポートもののジーンズとかもおいてある店舗で助かった。

その分高かったけど。

おまけにこの人たちけっこういい体をしてらっしゃる。

下手なシャツとか着せるとぴっちりぴちつてえ。

くそう、細マツチヨ以上じゃないか。

でも筋肉ムキムキのマツチヨでもないし難しい体系だなあもう。

もちろん着たきり雀にするわけにもいかず着替えやら下着やら。

ええ、買いましたとも。

お金に羽が生えて飛んでく絵があるけどまさにそれだ。

「コマリ、このトランクスとボクサーパンツとやらはどちらがいいんだろうか。それにどうやら大きさに違いがあるようだ。がどれが合うのかさっぱりだ」

知るかあ、穿いて確かめろ！

と言いたかったけれど。

彼らのキラキラオーラに引き寄せられ、目の色を変えて群がった女性の店員さんにサイズを計ってもらって、最近の男性の好みも伺いました。

ああもうあのスーパーに行きたくない。

「マスターも冠奈さんも普通の人間です」
疲れた表情で小鞠は返事をする。

彼女の自転車はオロフが押して、前カゴと後輪の荷台には大荷物がくくりつけてあった。

シモンたちは自転車を初めて見るらしい。

というかこっちの世界で見るもの聞くものすべてが珍しいのか、いろいろ観察したそうだったけれど気づかないふりをした。

だって自動車を見るために車道に飛び出しかけるし、歩行者用信号機に登ろうとするし、危ないったらない。

人様の迷惑になるからやめてと言ったら、やっとおとなしくなってくれた。

喫茶店に来るまでよく事故にあわなかったよね。

ああ、それにしても明日からの食費どうしようかなあ。

当分モヤシオンリーとか嫌すぎる。

というかこの人たちの分も食費がかさむんだなと気づいて小鞠は蒼白になった。

ここはもう、駄目元で聞いてみよう。

「あのお、うちに居候するんであれば食費とかもらえます？ちよつと今日、散財しちゃったんでお金がですね」

1000万の借金を立て替えて払ってくれたが、その返済方法はまた家でゆつくりすればいい。

とつと異世界に帰ってもらうつもりだから、こちらから異世界へ送金ができるかとか確かめなきゃ。

「金の心配には及ばない。手持ちは悪党どもにくれてやったので、新たに国から送ってもらおうよう手配した。今頃はコマリの部屋に届いているはずだ」

おお、さすが王子様。

お金持ちだ。

ヒヤッホウと家に帰った小鞠は、自分の家の玄関の鍵が開いていたことにまずぎよつとなつた。

「すまない、コマリ。鍵がわからず開け放つたまま出かけたのだ」
無用心だなあ。

泥棒さんがいませんように。

恐る恐る玄関を開ける小鞠を制してオロフ、テディの順に部屋に入つていく。

なんだかVIPになった気分。

つてオイ、だから靴を脱いでつてば。

小鞠がテディの着たジャケットのフードを掴んで引っぱると彼はウグと息を詰ませた。

すみません、力が強かったみたいです。

「靴を脱ぐのは眠る時ぐらいなもので失念しておりました」

持ち帰った自分たちの衣類や、買ったばかりの服が入った袋を置いてスニーカーを脱ぐテイの前で、オロフがシモンを振り返る。

「シモン様、人の気配はございません」

「そうか。コマリ、中は安全だ。それにしてもこの暗がりには困る。

蝋燭はどこにあるのだ？」

「蝋燭は必要ありません。電気がありますから」

壁のスイッチを押すと廊下に電気が灯る。

それを見て3人は感心しきりだった。

いえ、あの、電気の仕組みとか言われてもわかりませんが。

大学の専攻は経済学ですってば。

それでもしつこく尋ねられ、電気というのはプラスとマイナスがあつて雷も実は電気でして、としどろもどろに小鞠が説明すると、雷を閉じ込めて明かりを得ているのかと言い出した。

すごい魔法だと話すのを横目で見つつ彼女は溜め息をつく。

もういい、それで。

中世だか近世だかのヨーロッパのような世界からきた彼らには、科学の結晶も魔法のように見えるんだろう。

ともかく4人分の夕食を作ろう。

堅実安定を目指す上で健康な体は必須。

コンビ二弁当とかカップ麺なんてもつてのほかだと、小鞠は自炊を心がけている。

腕前はプロ級といたいがおそらく並だと自分の料理を食べて思う。

料理の前に洗面所で手洗いと嗽をと扉を開けた小鞠は、中からザバアと金貨が雪崩してきたため度肝を抜かれて立ち尽くした。

「ああ、やはり届いていたようだ。コマリ、食費には足りるだろう

か？」

ええ、そりやもう充分すぎるほど。

っていうかこの金貨をどこで換金しろというのか。

ただだか20歳そこそこの小娘が大量の純金金貨を持っていけば、あやしまれることこの上ないと思うのですが。

ちよつと足が金貨に埋もれて身動きが取れないぞ。

いやいやそれよりもよ。

こんなに金貨を送ってきてお城のお金がなくなりませんか。

小鞠が質問するとシモンは笑顔でのたまった。

「心配には及ばない。これはわたしの金だ」

つまりあれですか。

ポケットマネー。

いわゆる小遣い銭。

いま、ちよつとシモンの首を絞めなくなったのは仕方ないと思う。

「こんなにいきりません」

「遠慮は要らない。わたしの持つ金山から取れるものだ」

金山。その名のとおりに金ぴかの山だったりして。

浮んだ冗談は冗談に思えない。

小鞠はすっかり疲れた笑いを浮かべ足元を見下ろした。

この金貨10枚くらいでしばらく遊んで暮らせると思っけどなあ。

彼女はきつちり10枚金貨を手にとってシモンを見つめた。

「10枚いただきました。後はそちらで必要な枚数を取り分けて、残った分は送り返してください」

「いや、これはコマリにと」

「いきりません。こんな大金をもらえるはずないでしょう」

「だが」

ああもうしつこい。

「だったらあなたの国の貧しい方々に分け与えるとか、生活保護制度でも何でも敷いて国民が豊かになるようにしたらどうですか？町の整備とか医療の充実とか知識を得るための学校とか、将来国のためになることにお金を使ってください。ともかくいらないうつたらいいのっ、とつと送り返せえっ！」

そのときぼそりとテディの声が聞こえた。

「もらっておけばいいでしょうに」

うんうんと頷くオロフも腕を組む。

「金はあっても困るもんじゃない」

困るんだってば。

堅実安定が根底から覆るほどの金はいららない。

そもそももらういわれもないし。

小鞠はじろりと従者を見てからシモンへ目を向けた。

「わたしは生活に必要な分のお金をいただきたくて言ったつもりです。そしてその分はいまいただきました。誤解があつてはいけませんので先に言っておきます。わたしは高価な服や宝石といったプレゼント攻撃は嬉しくありません。そういうたものでわたしの心を得ようと思うのであれば、いまずぐ異世界に帰ってください。時間の無駄ですから」

ズボと金貨から足を引き抜き小鞠はシモンたちを残しリビングへ進む。

ちよつときつく言い過ぎたかと思いつながら彼女は扉を開けた。

「明かりを」と背後でシモンの声がしたと思つたら、電気のスィッチを入れていないのにいきなり室内が明るくなる。

小鞠は目の前の光景に自分の目を疑った。

だってそこは別世界。

ええっ、うちのリビングどこいったの。

奥行きがない。

もともとあった家具が消えて宝石が埋め込まれたテーブルやソファがあるし、見たこともない美術品が並ぶ飾り棚とかってなんの冗談ですか。

しかも中央に鎮座するでかいベッドはなんなのよ。

そのうえ天井に光る玉が浮いてる。

なにこれ、魔法の明かりとか？

「あああの、ここ、ここ　　ここって何がどうなって……？」

「小鞠の部屋に男3人も増えれば窮屈だろう。だから国の魔法使いと連絡を取って空間を少し広げてもらった。外からの見た目にはなんら変わりはないし、他は手をくわえていないので心配はいらない」

思わず小鞠はリビングと続くダイニングへ視線をめぐらせた。

ありえないリビングの空間が途中で一気に萎んだようになり、そこにはこじんまりとしたダイニングキッチンが残っている。

ああよかった。

晩御飯が作れる……って違あう。

うちんちのソファやテレビはどうなったんですか。

質問したいことは山ほどあれど、ともかく最初にこの確認をしておく。

「えーと、つまりここはあなたの部屋になったと。そういうわけですか？」

「わたしとコマリの部屋だ。だからベッドも特別上質のものを用意

した」

もう本当、男の風上はいつたいどこに。

小鞠ははあと溜め息をついて首を振った。

「わたしは自分の部屋で休みますから、ここはあなたと従者の方で使ってください。まず食事を摂ってその後いろいろ話しましょう。

今後のこともありますし」

人間腹が減っては戦ができぬと言うからね。

その後、小鞠が作った和風料理はシモンたちの口にあっただのかどうかかわらない。

ただ、買い置きであった漬物を出すとおかしな顔をしていたから、あれは口に合わなかったのだろうことは彼女にもわかった。

魂の片割れとなるコマリは少々変わった女性だった。

異世界というまったく自分とは違う世界で生きてきたのだから、文化も何もかも違うのは理解できるが、贈り物は嬉しくないと言われた。

金貨のことだがあれは他意はない。

ただ今後、金に困らねばいいと思ったのだ。

そう思ってしまうような出来事が昼にあったからだ。

魔法使いと神官の協力を得て、なんとか魂の対となる女性の世界に降り立てたと思った矢先、コマリは悪党どもに脅迫されていた。

扉にはめ込んだガラスから様子を窺えば蒼白になりながら果敢に悪党と立ち向かっていた。

なんとという勇敢な女性だろうかとその美しさに一目で目を奪われたがすぐに気づいた。

膝の上できつく組んだ指が震えていることに。

ともかく助けねばと乱入し悪党を追っ払った自分に、彼女は晚餐のあと感謝の意を述べてくれた。

もっと早くに礼を言わねばならなかったが、昼間は気が動転していたと謝罪までしてくれた。

何年かかって働いて返すと言われ、それには及ばないと告げるとコマリは、申し訳なさそうなそれでいてホッとしたような、また困ったような、そしてそのどれでもない不思議な表情になった。

どうしてそんな顔をされるのかわからない。

「施しを受けているとお思いになったのでは？」

早々に自室で休んだコマリのことをティとオロフに尋ねれば、ティからこんな返事が返された。

「コマリ様はわが国の貴族のご令嬢とは違い自立心旺盛な女性に見受けられました」

とはオロフだ。

確かにコマリは今日、給仕の仕事に励んでいたし、来年の働き口も見つけてあると言っていた。

労働し給金を得ることを美德としているのだろう。

なるほど、そこへ好意ではあっても何かを贈るといふ行為は、彼女にとっては施しと映り、自尊心を傷つけることになるのかもしれない。

身の丈に合わぬ贅沢は墮落や破滅を導くと言っくらいしっかりとした女性だ。

民が飢えて苦しんでいるのを見向きもせず、毎日遊び暮らして国を傾けた愚かな後の話を聞いたことがあるが、コマリなら后となっても贅の限りを尽くして遊びほうけることはないだろう。

何しろ堅実安定が座右の銘らしい彼女だ。

ともすれば吝嗇で面白味のない人物とも取れるがしかしコマリは違う。

暮らしぶりから見てもけして裕福ではないだろうに男3人分、こちらの生活用品を揃えてくれた。

彼女の自尊心を傷つけるような無粋な真似をした自分に、一瞬怒りを見せたがそれを見事に抑える自制心を持ち、過ぎる金は要らぬと毅然と言い切る。

わが国の民の生活をよりよくするために、またわが国の将来のためにその金を使えと、まっすぐに意見する瞳は曇りなく美しかった。

コマリとはなんと心優しく機智にとんだ才女たることか。そして慈愛に満ちた素晴らしい女性だろうか。

后には彼女しかありえない。

あのとき感動と興奮でコマリを抱きしめてしまいたかった。

けれどもどうも彼女はそういったことに少し内気であるらしい。

何度かつい抱きしめてしまったが、そのたびに硬直して顔を真っ赤にする。

それも可愛らしいが困らせるのは本意ではないのだとぐっと我慢した。

いつかこの腕の中に閉じ込め思う存分可愛がりたいが、どうすればコマリは自分に対して硬く閉じた気持ちゆめてくれるだろうか。彼女は実父を病気で実母を事故で亡くしたらしい。

更に聞けば親族に縁が薄いということ、彼女にはマスターキクオとカンナ以外頼る者はいないのだ。

そしてそんな二人に対しても実父の友人であるだけだから、という遠慮があるよう見受けられた。

コマリはきつと強くあらねばと己に課しているのだ。

だが少し肩の力を抜いて人に頼ることを覚えてもいいのではないか。

「その相手がわたしであればいいのだが、今はまだ無理だろうか」

シモンの呟きに従者二人は顔を見合わせたが無言のままだった。

休む旨を伝えると彼らは部屋を出て行った。

ティとオロフはコマリの両親が使っていた寝室で休むことになっている。

シモンが「消えよ」と言うと天井の光彩は消えた。

魔法で作られた光彩は自分の声に反応するように作られている。

それをコマリに説明した時は不思議そうな顔で、けれどどこか楽しそうに話を聞いていた。

このようなあどけない顔もするのかと微笑ましく思っ、ますます彼女から目が離せなくなつたほど。

ああやはり、自分は彼女の虜となつていく。だがそれすらも今の自分には心地よい。

コマリはここでの共同生活を一ヶ月と区切つた。

その間に彼女の気持ちを自分に向けなければいけない。

贈り物を喜ばずしかも触れれば硬直する。

あれでは愛の言葉も囁けない。

まるで難攻不落の砦のような彼女をどうやって陥落させればよいだろう。

自分という人間を包み隠さず見せるしかないだろうか。

小さく息を吐いたシモンは、それにしても、と暗がりのなか広いベッドで寝返りと打つた。

こちらの世界の魔法は素晴らしいものだった。

雷を閉じ込めてデンキなるものにして使つたり、炎を貯めておけるのかつまみを捻るだけで火がついたり、一瞬で水を湯水に変えたりする。

コマリの住むこのニッポンという国は水が豊富らしいのだが、湯殿では湯船から湯が減ると勝手に増えていた。

湯殿の狭さには難ありだがあの魔法はすごいものだ。

湯船から無駄に湯を捨てることもない。

ものすごい速さで黒い道を走る鉄の箱は危険だが、ジテンシャという乗り物は馬車より気軽に移動できる。

それにシンゴウというものもわが国でも作れば、馬車の事故も減る

だろう。

夜道に明かりを灯すのは犯罪を防ぐためとコマリが言っていたが、確かにそうかもしれない。

そこも検討してみなければ。

これらすべてを実現しようとするれば魔法使いたちにかなり負担をかけるだろうか。

ウト、と瞼が落ちてきてシモンは目を閉じる。

せっかくコマリが買ってくれたスウェットという寝衣だが少し暑い、と彼は寝ぼけ頭で思う。

城では夜着かもしくは何も着ないで寝ていたのだ。

ここはコマリの部屋だ。

そこを間借りしている手前、彼女の前で不敬な態度は取れまいが、上ぐらい脱いでも問題はないだろうか。

ベッドの中でもぞもぞとした彼は少しあつて満足そうな深い息を吐いた。

ああコマリ、この腕にあなたを抱いて眠りたい。

そんなことを思ううちシモンは緩やかな眠りに落ちていった。

携帯電話の目覚ましを止めてすぐ小鞠はベッドから起き上がった。寝起きはいい方だ。

よし今日も一日頑張ろうと着替えを済ませて部屋を出て行く。

いえ、嘘です。

いつもは実はもっと寝ぼすけです。

だって家に3人の猛獣、もとい男がいるんですよ。

安眠できませんでした。

けれど彼らは紳士だったらしい。

疑ってごめんなさいと小鞠は内心謝罪する。

パジャマ姿で朝御飯を作るのが常だが、なんとなく見栄をはって身支度を整えてしまった彼女だ。

部屋を出て廊下を突っ切りリビングのドアを開ける。

うわあい、やっぱり部屋の奥行きがめっちゃくちゃだあ。

慣れるしかないと自分に言い聞かせて、小鞠は静かにリビングの扉を閉めた。

ダイニングに続く別の入口があればよかったが、このマンションの間取りではダイニングとリビングは続いているので仕方がない。

よく見えないが部屋の中央のベッドでシモンはぐっすり眠っているようだ。

朝御飯のしたくすると起こしちゃうかなあ。

いやでももう午前7時ですからね。

今日は朝から講義があるしね。

卒業に必要な単位は取得してあるが、学費を無駄に捨てる気にならず、4回生でありながら結構な講義に出ている小鞠だ。

それに今日は週一のゼミがある日。

ゼミ、と思って小鞠はムフと顔をニヤケさせた。

(ミネ先輩に会える日だもーん)

同じ教授に師事している大学院生峰岸爽は彼女の憧れの先輩だった。ゼミには教授の助手として必ず参加する。

テニスサークルにも入っていて女の子に人気のある人だ。

優しく笑顔が素敵なその名のとおり爽やかな彼を、その他大勢の女の子の一人として眺めている。

それでいいのだ。

話ができれば一日ハッピー。

(どこぞの異世界王子より憧れの先輩とのデートの方がまだ現実味があるよねえ)

いや、デートなんてしたことないですが。

はつきりいつて妄想ですが。

最初のデートはどこがいいだろう。

映画は数時間話もできないから却下かな。

じゃあウィンドウショッピングとか。

駅で待ち合わせて「待った?」「ううん、いま来たところ」とかベタですか。

いや、でもベタっていいよね。

で、ちょっとはにかみながらも手なんか繋いじったりなんかしてえ。

ぎゃー、照れるう。

「楽しそうだな、コマリ」

ポウルにカシヨカシヨ卵を溶いていた小鞠は間近に聞こえた低音に

ビツクウと肩を震わせた。

振り返ってシモンを見た。たんシंकに張り付く。

「な、な、ななななんでハダ……裸あ!？」

欠伸をしていた彼は小鞠の言葉に自身を見下ろし、次いできよとんと首を傾げた。

「下は穿いているのだから裸ではないが？」

「上が裸だあ!服を着ろっ!」

「コマリは時々言葉遣いが男っぽくて勇ましいな」

いや、だから暢気に笑ってないで早く服を着てえ。

ああ、男とつきあったこともないのに、男性パンツを買ったり裸を見たりしてるって。

そういえば洗濯もしなきゃですよ、パンツ。

うわあ、なし崩しにこういうのに慣れていきそうで嫌だあ。

ともかく逃げよう、と小鞠はボウルを置いて部屋を後にする。

洗濯しておけば朝食の後、干してから大学へいけるだろう。

洗濯機のある風呂場を目指す彼女のあとをシモンもなぜかついてくる。

「どうしてついてくるのですか？」

「顔を洗おうと思ったのだ。ばするうむで洗うよう昨日コマリに聞いただろう?」

そうですね。

でもなんというか。

これはアヒルさんやガチョウさんの刷り込みみたいです。

ピヨピヨ親鳥の後をついてくる。

つつつてもこの人は大型犬って感じなんですけど。

「あのお、首のアクセサリー外さないと顔を洗うとき濡れちゃいま

せんか？」

洗面台に立つシモンに小鞠は余計なことかもと思いつつ、そして半裸の彼をあまり見ないようにして、胸にある首飾りを彼女は指差した。

じつくり見てはいないが、宝石のような石それ自体がうつすら輝いているようだった。

光が反射したらキラキラするオパールとかかなあ。

水に弱い宝石とかあったような気がするんだけどオパールは違ったかな。

「これがなければコマリと言葉が通じなくなる。濡れたら拭けばいいだけだ」

え、それマジックアイテムだったんですか。

試しにシモンに首飾りを外して話をしてもらったら、いままで聞いたこともないような言語で何を言っているのかさっぱりだった。

シモンによれば言葉は首飾りで何とかなるそうだが文字はさすがに読めないらしい。

そうか。

魔法が存在する国から来たとはいえ、やっぱりそこまで万能じゃないんだな。

とか何とか思っていたら。

「うつかりしていたな。言葉が通じなくては困るとそればかり気にしていたが、この世界の文字も読めるようにしておかねば」

あはは、魔法って何でもありませんね。

もう何を見ても、聞いても、驚くまいと小鞠は自分に言い聞かせた。

その後、オロフとテディもすぐに起きてきて朝食を済ませた。

二人の従者はシモンより遅く起きたことに恐縮しきついで、小鞠が慣れない異世界で疲れたのだろうとフォローしたがずっと萎れていた。

シモンも怒っていないんだしそんなに気にしなくてもいいと思うんだけど。

従者ってたいへんだなあ。

* * *

そして、現在小鞠は一人で大学にいた。

普通、大学は友人や恋人と待ち合わせをしていないかぎり一人で行くものだ。

だからこれが普通。

けれどシモンは小鞠が普段は学校に通っていると告げると、「外界はジドウシヤやばいく、ばすなどが走っていて危険だ。コマリと共にゆく」と言い出したのだ。

そんなありがた迷惑な、とは思っても声には出さなかった。

本音を隠すのは日本人の美德ですからね。

ともかくどうか彼らを家に残していけないものかと小鞠は考えたあげく、彼らに任務と称して家事をさせることにした。

テディには掃除機がけ、オロフには食器洗いアーンドお片付け、シモンはお風呂掃除と役割を分担した。

シモンに掃除をさせることに従者一人は難色を示したが、働かざるもの食うべからずとおしきった。

それぞれの任務は各自、自分で行うこと。

手伝うことまかりならん、とまで言ったためか彼らは一人ずつ、それぞれやったこともないのであるう家事を、四苦八苦しなからこなしていた。

電化製品は彼らにとって魔法の道具と映るらしく、テディは掃除機に慄いていたけれど。

それを横目に洗濯物を素早く干して小鞠はこっそり家を後にし、無事、大学までこられたというわけだ。

(毎日、こんな調子かなあ。ああ、平穏な日常に戻りたい)

ともかく大学では平和に時間が流れ、午後一のゼミに小鞠は軽い足取りで向かう。

(心のオアシス、ミネせんぱあ〜い)

学食から学舎までの道すがらご機嫌な彼女は、今月末に行われる大祭の準備にいそしむ学生たちをチラリと見やる。

ゼミからも何か露天を出展するって言ってたなあ。

そのあとはきつと打ち上げだから先輩とお話できる機会が増える。

朝と同様ムフムフと顔をニヤつかせている小鞠は校舎に入る前、黄色い声を聞いて背後を振り返った。

おや、人が群がってる。

彼女は「ん？」と気がついた。

(なんだか昨日一日ですっかり見慣れた金色が見えたようないやいや、気のせいね)

クルと前に向き直って校舎に入った小鞠は、一瞬思い出した異世界人たちを頭から追い出した。

はずが無理だった。

そういえば彼らのお昼ご飯を作り置きしてこなかった。

（大丈夫、冷蔵庫とかガスコンロの使い方は教えたしなんか作って食べ　　てるかなあ？）

シモンは王子なのでもっての他だろうがティモオロフも料理はできそうにない。

おなかをすかせてたらどうしよう。

小鞠の脳裏に大型犬が3匹お腹をすかせているところが浮ぶ。

「コマ、入口塞いでたら入れないんだけどな」

「わあ、ミネ先輩。こんにちはっ……あ、や、すみません。どきま
す、いますぐ速やかに」

憧れの先輩の出現に小鞠がのけぞる様にして背後に後退ると爽はお
かしそうに笑った。

2歳年上で少し童顔な甘い顔立ち。

くう、その笑顔かつ可愛すぎます、先輩。

「コマはいつも言動がおかしいよね。なんか俺、緊張させてる？」
「いいえっ、先輩が先輩に道を譲るのは当然のことですからお気に
なさらず」

「あー、ミネ先輩あいだあ」

そこへ媚びを含んだ甘ったるい声が響いた。

それだけで小鞠には相手が誰だかわかってしまう。

(でたな、皐月満留)

廊下を走りこんできたのは小鞠の同級生の満留だった。

彼女は頭のとっぺんからつま先まで女の子っぽく、男子にすごく人
気がある。

可愛らしい顔立ちは舌足らずな口調と相まって幼く見えるが、豊満
な肉体を持つというアンバランスさが男心を刺激するらしい。

たわわな胸を揺らし廊下を駆けてくると爽を上目遣いで見上げる。

「こんにちはあ、ミネ先輩。あれ、コマちゃんもいたんだあ」

いままさに気づいたとばかりに満留が言う。

さっきからいましたか。

ミネ先輩、そこまでガタイよくないし隠れませんか。

「やあだあ、ミネ先輩ばかり見てて気づかなかったあ。コマちゃん、元気〜?」

「エへ、と笑うのを小鞠はよく言うわと内心突っ込む。

普段、学内で会ってもガン無視で声なんてかけてもこないくせに。

「うん、臯月さんも元気そうね」

「ねえねえミネ先輩。いま外でねえ、」

笑顔で返事をする小鞠の言葉尻にかぶさるように満留が爽に話しかけ、教室へ促すよう彼の腕を引っぱる。

すごいなあ。

あれ、胸をミネ先輩の腕に押し付けてるんじゃないの?

こういう自分の見せ方も売り込み方もうまい女の子がいるが自分にはできない。

(はう〜、せっかくミネ先輩とおしゃべりできるチャンスだったのになあ)

小さく息を吐いた小鞠はいきなり背中に悪寒が走った。

爽たちが続いて教室に入りかけていたはずが立ち止まる。

なんですか、いまのゾクゾクは。

そこへ廊下の向こうから声がした。

「コマリっ、見つけた」

声にぎよっとした。

恐る恐るそちらを向いて金髪碧眼の王子様の出現に言葉を失う。

彼の背後にはオロフがいた。

(シモンっ!どうやってここまで来たの!?)

家から大学まで行くには電車に乗らなきゃいけません。

昨日もそうだけどうして居場所がわかるの。

魔法グッズでももってるんですか。

さつき校舎に入る前に金髪の外国人を見た気がしたのは気のせいじやなかったんだあ。

「ああよかった、無事で。外界は危険だから共に行くと言っただろう」

近づいたシモンに強く抱きしめられた小鞠は、爽と満留が驚愕の表情でこちらを見ていることに気づいた。

いや、教室の扉が開いているから中の人たちにも丸見えだ。

（ミネ先輩に誤解されるう。っていうか、わたしの平穏な日常力ムバーク）

そこへキンコンと授業開始のベルが鳴る。

ちよつとこれ、どうすんの。

まさかこのままゼミに出席しろと。

教授になって言い訳すればいいんだと小鞠は抱きつくシモンを引っぱがし、彼と共にオロフの腕も掴んで廊下の隅へ引っぱる。

「いまからゼミ 授業……えーっと講義が始まるの。心配要らないから帰って」

「一緒にいる」

「車もバイクもバスも大学には入ってこないし危険なことなんてないから」

「いる」

えーい、このわからず屋があ。

オロフにどっか連れてけ、と目で訴えたが笑顔で首を振られた。従者は主に逆らえませんか。

「コマ、その二人は？留学生かな？」

「ひゃ、ミネ先輩。あ、あのこの人たちは一ヶ月間だけホームステ

「イに来た人たちで」
爽が笑顔で話しかけてきたため小鞠はしどろもどろに言い訳する。
「へえ、そうなんだ。日本語が上手だね。どこの国の人？」
「名も知られていないような北欧の小さな島からだ。ところで「コマ」とはやけに馴れ馴れしいが？」
昨夜、何か質問された時の場合に、言い訳を考えてあったため、シモンがその通りに答えながら一步前に出て爽を威嚇する。
番犬としては合格点だけど誤解される。
やめてえ。

「渾名だよ。仲のいい者はみんなそう呼んでる。彼女だって「コマちゃん」って呼んでるし」
爽が満留を振り返ると彼女はにっこり笑顔を浮かべた。

「わたしい、ミチルって言います。コマちゃんとはすっごく仲がいいんですよお」
おいこら、ちよっと待て。

仲良くされたこともしたこともないでしょうが。
「でえ、二人ともお名前はあ？」

「コマリの友人？」とシモンは呟きこちらを窺うのがわかった。
仕方がないので小鞠はシモンとオロフに二人のことを紹介する。

「こちらが先輩のソウ・ミネギシさん。で、こちらが……ミチル・サツキさんです」

満留のことを友人という気がしなくて一瞬言葉が詰まってしまった小鞠だ。

シモンは頷いて自分の名前とオロフを紹介した。

「きみたち、もうチャイムは鳴っているが何をしているのかね？」
げ、教授。

帰らなくともかく外で待っていてと小鞠がシモンに言うのを聞

いて、教授は「わたしのゼミに興味があるなら見学していきなさい」とおっしゃってくださいました。

ああ教授、すみません。

この人たちは教授のゼミに興味があつて、ダダをこねているわけじゃないんです。

なので小鞠は90分の授業のあと教授への礼もそこそこに、シモンとオロフをつれて早々に教室をあとにした。

「資源に希少性を付けより購買欲をあげるにはどのようにすればよいか」とか、そこに倫理や道徳、人の心理が働くところなるかだとかいや、実のためになる話だった。教授に少々話を窺いたかったのだが」

「授業料……講義のお金も払ってないのに駄目です」

「ああそうか。そうだったな。ふむ、これ以上は講義代を払わねばならないか」

もっともらしいことを言つてやるとシモンはすんなり諦めてくれた。

「そういえば今日はデディは？」

「昨日のように鍵を開け放つて部屋を出るのが躊躇われたのでデディは留守番だ。国に金貨を送り返さねばならなかったし、わたしの仕事の調整もあるから今頃は国の連中と話し合ひだらうな」

いいのか、王子が仕事ほっぽつて異世界なんかについて。

「ところでコマリ、そろそろわたしのこともあなたではなく名前で

そこに「待つてエ」と舌足らずな声が聞こえシモンの言葉が途切れ

来たな、皇月満留。

やっぱりと小鞠は思う。

ゼミの間中、チラチラと彼女は何度もシモンとオロフを見ていたからだ。

振り返って小鞠は引きつった。

ゼミの他の子もいますけど。

そういやゼミ生みんな美形外国人に興味深々で、好奇心塊の目を二人に向けてたっけなあ。

「まあ、コマちゃんったらシモン君とオロフ君を一人占めしちゃうんだからあ」

いえ、そんなつもりは毛頭ないし。

ただいろいろ突っ込まれて異世界人とバレルのが嫌なだけだから。

オロフは王子たるシモンが「君」付けて呼ばれることに渋い顔をしたが、シモンが小さく首を振ったため、不承不承というように開きかけた口を噤んだ。

「近くのお店でお茶でもしながらシモン君たちの国のお話聞きたいなってことになったの。ね、みんなで行かない？」

行きたくないっ。

そうはつきり言えたらいいんだけどなあ。

でもそのせいで来週からゼミでハブかれるのやだなあ。

や、勇気を出せ。

シモンたちのことで何かボロがでるのは困るんだし。

「あの、ごめんね。これからわたしバイトがあって」

「そうなのお？じゃあ残念だけどコマちゃん抜きで行くしかないか

あ

全然顔が残念そうじゃない。

むしろ喜んでるっぽいですが。

満留がシモンとオロフの手を取って引っぱる。

「行こっか」と小首を傾げて笑顔を向けるその顔は、男ならメロメロになるのだろう。

現にゼミの男の子たちは彼女の微笑みに鼻の下が伸びている。

「すまないがわたしはコマリの側を離れたくないので遠慮する」
シモンがやんわりと満留の手を振りほどくのに倣うように、オロフも「わたしもお二人の側におります」と彼女につながれた手を解いた。

その瞬間、満留の顔に屈辱の表情が見えた気がした。

だがすぐに取り繕って笑う。

「ええ〜？シモン君ってコマちゃんの彼氏い？」

「口説いている最中なのだ。そのためにここに来たのだから」

きやあ、と満留以外の周りの女の子が声を上げる。

「いいなあ」「わたしも言われてみたい〜」という横で、男の子たちも「うっわ、外人って愛情表現ハンパね」「佐原にも春が来たじやん」とニヤニヤ笑っている。

この馬鹿シモンっ。

みんなの前でなんてことを言いやがるか。

一カ月後、異世界へ帰るんでしょうが。

余計な波紋を広げるなあ。

わたしは目立たず騒がれず平穩無事に堅実安定生活を送りたいの。

恋人は異世界の王子じゃなくこの世界の普通の人がいい。

ちよっと欲を言えばミネ先輩のようなかっちょ可愛い人が好みだけれど。

(うわーん、このこと絶対ミネ先輩の耳にも入るう)

「邪魔しないからねー」と笑顔で去っていくゼミの友人たちに手を振る小鞠は、ハアと大きく溜め息を吐いた。
まあいい。

皆で仲良くお茶会は避けられたんだし。

「コマリはもしかするとミチルが苦手か？」

「えっ？なんで？」

「いや、なんとなく。わたしはあのような裏表のある者は好きではないから同じではないかと。愛魂の対となる相手とは人の好みも似るのだ」

「裏表って 気づいてたんですか？」

「わたしは立場上、腹の読めない相手ともつきあわなければならぬいからな。人を見る目は自然と鍛えられる。 と偉そうなことを言えるほどわたしもそこまで見る目があるわけではないのだが、あの娘はわかりやすすぎる。なあオロフ」

シモンがオロフに目を向けると彼はあっさり頷いた。

「己の欲を満たすために笑顔で人を貶めるタイプでしょうね。ただ感情的で計画性があるようには見えませんから、注意なさればそこまで害はないでしょう」

「えーと、でも男の人はああいう可愛いタイプって好きでしょう？」

「コマリのほうが数百倍も可愛い」

いやそれは愛魂とかいうので目が曇ってるの。

シモンの言葉はあっさりスルーして、オロフはどうだろうと小鞠が従者を見れば、彼はにこやかに言い切った。

「体目的なら　　という程度ですね、わたしは」

はあ、まあ、好みではないことはわかった。

でも齒に衣を着せようよ。

そんなバリバリ男の本音は聞きたくなかった。

ははは、と乾いた笑いで歩きだす小鞠の隣にシモンが並び、少し後ろからオロフがつき従う。

「昨日も後ろからついてきていましたけど一緒に歩いたら駄目なんですか？」

「わたしはシモン様の護衛ですから」

ついオロフに質問したらそんな返事が返ってきた。

「あの、でも気になるのでこういう広い場所では隣に並びませんか？」

小鞠の言葉にオロフは奇妙な顔をした。

えー、何か変なことを言ったかなあ。

「良い、オロフ。ここではわたしも周りの者と立場は変わらないのだ。そのように扱え」

あ、なるほどです。

シモンは王子様でした。

オロフにとってシモンは王の息子。

次期国王。

一介の騎士団員とでは身分が違いすぎるってやつね。
恐縮しつつもオロフは小鞠との間にシモンを挟むように並んだ。
が、シモンが首を振る。

「おまえはコマリの向こう側だ。姫を守るのは男の務めだろう」

いやだから「姫」は違っつてば。

庶民だからね。

なのにシモンとオロフに挟まれてしまった。

美形外国人に挟まれてお姫様扱いつて、女の子なら憧れるシチュエーションのはずが、実際されるとこんなにもいたたまれないものですね。

ああ、道行く人の視線が痛い。

(わたしだつてこの二人に不釣合いだつてわかってるからあ)

針のむしろの思いで駅に辿り着き、シモンとオロフの切符を買って彼らに手渡すと変な顔をしている。

電車という乗り物に乗るのに必要だと伝えた小鞠は、つい疑問が口をついた。

「あのお、大学までいっただいどうやって？どうしてわたしのいる場所がわかるんですか？」

「コマリの愛魂と引き合うから大体の方角がわかるのだ。それを頼りに歩いていたら親切な者がジドウシャでここまで運んでくれた」

それ、絶対女性だよな。

「よくわかったな。コマリの住む国は親切な者が多い。心豊かで平和だ。カッレラ王国もかくありたいな」

平和なのはおまえの頭だつ。

それは下心ありありで近づいてきてるんだつてば。

さつき少しは人を見る目があるようなことを言ってたくせに、思いつきり騙されかけてるじゃないの。

「もういっそ、その親切な方の中からあなたのお后を選んでください」

「何を言うのだ。コマリ以上に素晴らしい女性はこの世に存在しないのに」

ねえ、言っていていいかな。

この人の目って本当に曇っていると思う。

子どものように目を輝かせて電車に乗るシモンとオロフはやはり乗客の目を引いた。

魔法の国には電車だってないだろうからね。

でもそんな舐めまわすような目をして車内をうろつかないっ！

不審者に見えかねないでしょうが。

小鞠がおとなしくしてと止めていると、近くにいた学校帰りの女子高生たちが「ほら、注意してるしやっぱマナージャーじゃない？」と話しているのが漏れ聞こえた。

いいよ、もう。

芸能人のマナージャーで。

世間の目は正直だ。

自分と彼らじゃこんなにもつりあわないと言ってるのに。

(お后様なんて冗談じゃないっつうのよ)

そんなわけで最寄駅に降り立った時小鞠は心底ホツとした。

「ここから歩いているとバイトの時間に遅れてしまうのでわたしは自転車でいきますね。二人は家に」

「一緒に行く。それにここからコマリの部屋までの道がわからない」
はあ、さいですか。

好きにすると小鞠は自転車置き場へ向かう。

そこへゴウと突風が吹いて直後、頭上でガキンと金属音がした。

ガキッって何の音？

上を向いた小鞠は駅前ビルの看板が落下してくるのを見た。

(は？看板が落ちてる？)

思考停止。

「危ない、コマリっ」

強い力で後ろに引き寄せられた瞬間、今まで自分が立っていた場所にバアンと看板が落ちてきた。

周りで悲鳴が沸き起こる。

え、あの、レンガ舗装されたはずがレンガが砕けて看板もへしゃげてますが。

というかあの場に立ってたら砕けていたのは自分の頭。

思った瞬間、小鞠はカクンと足の力が抜けた。

「コマリ、大丈夫か？」

倒れそうになる彼女をシモンが抱きしめる。

思わず彼の服を握り締めていた。

「あそこ、に、立ってたら……し、死んでた」

自分の言葉に震えが走る。

周りに人だかりができ始めていた。

小鞠は我に返ってシモンとオロフの手を引っぱる。

きつと警察が来るはずだ。

(逃げなきゃ)

携帯電話を取り出す人が見えて彼女は急いでその場を走り去る。

「ちょっと、あなた！怪我は！？」と現場を目撃していたらしいおばさんの声が聞こえたけれど、気づかないふりをした。

「コマリ、ちょっと待て。コマリっ」

いつもより厳しい声音とともにシモンが立ち止まる。

手首を引っぱられて同じように立ち止まった小鞠は、肩で息をしなから彼を振り仰いだ。

「警察がくるから逃げないと」

「もう充分離れた。というよりわたしたちのことはいいんだ。それよりもっと自分の心配を」

ふわりとした感覚に気づいたときにはシモンの腕の中にいた。抱き潰さない程度に力がこもって安堵の声が耳に届く。

「よかった、無事で。本当に 怪我はないか？」

そう言っただけで覗き込んでくるシモンの頬に赤い痕が走っている。

看板が落ちた時、砕けたレンガが看板の破片が飛んできたのかもしれない。

「血が」

小鞠が手を伸ばすとシモンは顔を引いて彼女の指先から逃げた。

「コマリの手が汚れる」

反射的に小鞠は彼の頬を両手で挟んで引き寄せいた。

「わたしを助けてくれた時に怪我をしたんでしょう？手当てぐらいさせて。ごちゃごちゃ言わないでおとなしくしなさいっ」

「はい、コマリ」

よし、おとなしくなった。

怒鳴られて笑顔になるこの人の感性はわからないけど。

小鞠はカバンを探り絆創膏を財布の中から引っ張り出す。

もしものときのように絆創膏は持ち歩いているのだ。

ポケットティッシュで滲む血を拭い、ぺたりと絆創膏を貼る。

「これでよし」

「ありがとう、コマリ」

にこにこと嬉しそうな顔で微笑むシモンに頷くコマリだったが、礼を言うのは自分のほうだったと彼の目をまっすぐに見つめた。

「わたしこそ助けてくれてありがとう。シモンがいなかったら死んでたわ」

あれ、なんだかシモンが驚いた顔をしてる？

「ああ、やっとわたしの名を呼んでくれたな！コマリに呼ばれると特別な名に思える」

ガバア、と抱きつかれて小鞠は身動きが取れなくなった。

うっ、さっきより力が強いです。

動けないってば。

助けるとオロフに目で訴えたがさりげなくそっぽを向かれた。

それにしても名前ってなに？

そんなことを気にしてたのか。

またシモンに耳と尻尾が見える気がしてクスと小鞠は笑ってしまっ。

(やっぱりシモンってなんかちょっと可愛いかも)

そんな彼女の笑顔を見てシモンが息を詰めたのがわかった。

「コマリ、ああもう本当になんて可愛い」

うちゅ、と頬にキスされて小鞠は一瞬停止した。

そして反射的に平手を繰り出す。

ぱちんっ！

頬を叩いたとたんオロフが目を開き、叩かれたシモンも驚いた顔をしている。

「頬にキスぐらいでシモン様に張り手など」

「頬にキスぐらいじゃなあいつ」

こういうことは最初が肝心なのよっ。
甘い顔をすればつけあがる。

「ここは日本だ。挨拶にキスする国じゃないのっ！このセクハラ王子いゝ」

「セクハラとは昨日マスターキクオからも聞いたがどついう意味だ？」

「性的嫌がらせってことですっ」

「嫌がらせ？わたしがコマリにそんなことをするはずがない。これは愛情表現だ」

「された本人が嫌がってたらセクハラなの、バカ王子」

「コマリ様、いくらシモン様の王妃になられる方でもこの暴言の数々はさすがに目に余るものがあります」

「うるさいっ！王子だからって何でも許されるはずないでしょうが、そういう勘違いしていると誰もついてきてくれない裸の王様になっちゃうんだからね。どんなに身分がある人だって悪いことをしたら叱られなきゃいけないの。わかったかっ！！」

小鞠の剣幕にシモンとオロフは同時に頷く。
わかりやあいいのよ。

よしとばかりに歩き出す彼女の背後でぼそぼそと声が出た。

「オロフ、裸の王とはなんだ？」

「わかりかねますがおそらく王の傍若無人な振る舞いは、いずれ国

を破産させるということでは？だから着る物がなくなったのでしよう」

「なるほど。立場ある者は身分に胡坐をかいてはいかんと教訓なのだな」

うん、まあそういう解釈もありだね。

シモンが魔法の首飾りでこの世界の文字を読めるようにすると言っていたし、今度子供向けの童話や物語を図書館で借りてこよう。で、それを読んで王子たる自分の立場を思い出してさっさと異世界に帰ってください。

小鞠は二人の会話は聞こえないふりをした。

「は？一ヶ月帰らない？」

王城の神祀殿に入り異世界と連絡を取った魔法使いリクハルドは、魔法陣の中に見えるテディの言葉に思わず声をあげた。

息子が后を連れ帰ったならさっさと王位を譲り、王妃と隠居生活と称して世界を旅しようと、ウキウキと旅行計画を練っている王になんと報告すればいいのか。

ついでに言えば王付きの魔法使いとして長年王に使える父も、そろそろ若い世代にとつい昨日、王子が王位を継承する時に、リクハルドへ家督を譲ろうと言ってくれたばかりだ。

（ああ、出鼻を挫かれると親父はすぐ臍を曲げるからなあ……八つ当たりされる）

そして、おそらく王は不機嫌になるだろうし、王妃は夫との旅行が先送りにされて拗ねるだろう。

結婚して何十年と経つが仲の良いご夫婦だから。

そんな王と王妃を見て王夫妻命の父は、また機嫌が悪くなり嫌味の一つや二つや三つ、ちくちくと自分に言ってくる。

ああ、間違いなく。

王と王妃と父親の三人の顔を思い浮かべたリクハルドは、胃が痛みそうになって思わず腹を押さえた。

テディによるとシモン様は一ヶ月異世界に留まり、その間に愛魂の対となる女性を落とさなければいけないらしい。

どうしてそんなややこしい話になっているのだろう。
気に入ったのなら無理やりにも連れ帰ればいいものを。

シモン様は誠実な人柄をした良い方だ。

王たる資質も申し分ない。

相手の女性も最初は嫌がったとしても、きっと将来的にはこちらにきてよかったと思うはずだ。
なにより后ともなれば苦労知らずではないか。

「コマリ様は堅実安定が何よりもお好きな方だ。贅沢は人を墮落させ破滅されるとおっしゃる。そんなものでは釣られないだろう。だから金貨もほしがらないのだ」

そう言ってテディは笑う。

その様子から察するに、彼はシモン様の后となるはずのコマリ様という女性を快く思っているらしい。

シモン様に忠誠を誓い、王子に近づく者はまず疑えと言い切る。

そのテディが珍しいことだ。

それだけでリクハルドはコマリという女性に興味を持った。

今わかることは、魔法使いが充分揃うこちらから数人がかりで異世界へ金貨を送るより、異世界から金貨を戻す方が更に魔力が必要であるのに、金貨を送り返せと難儀なことをさらりとおっしゃる女性だということだ。

魔力を増幅させる魔法石を使ったとしても、今日もまた自分をはじめとする魔法使いたちは疲労困憊となるだろう。

「こちらの世界はわたしたちの世界とは違った魔法を使っている。魔法石もなく魔法使いもないようだから、難しさがわからなくて

も仕方がないだろう」

リクハルドはまたも驚いた。

テデイがシモン以外の人間の肩を持ったからだ。

シモン様は別として、自分にも他人にも厳しいテデイにそこまで言わせる女性なのか、コマリ様というお人は。

それに異世界にはこちらと違う魔法があるらしい。

魔法使いたる自分からすれば、今後の魔法研究のためにもどのような魔法かぜひ知りたい。

「こちらの魔法の仕組みは魔力のないわたしにはわからないが、コマリ様はわたしたちの世界ではなかなかお目にかかれない女性だ。おそらくコマリ様の態度を見て不敬であると顔を顰める者もいるだが、わたしにはいっそ清清しく思えるほど男前な方だぞ」

「男前？」

それは女性に使う形容ではない。

ただ目の前の魔法陣に映るテデイは何かを思い出したのか楽しそうだ。

そんなテデイを見つめながらリクハルドはコマリ様に早く会ってみたいものだと思った。

シモン様、一ヶ月の間に必ずやコマリ様を落としてください。

次にシモン様から連絡があったときは、僭越ながら応援していますと告げてみよう。

* * *

異世界との連絡を終えたリクハルドは大量の金貨を目の前に、はあと疲れた溜め息を吐いた。

やはり異世界からこちらへ金貨を戻すのは随分と魔力を消費した。周りを見れば他の魔法使いたちも青色吐息といった風情だ。

これはシモン様たちをこちらへ戻すのは容易ではないだろう。

（我々魔法使いの体力を万全にしておくことはもちろんだが 質のいい魔法石を補充せねば）

部下に今ある魔法石の数の確認と上質の魔法石の補充を命じた。そしてリクハルドは部下からとんでもない報告を受ける。

大きさ、質ともに最高といえる魔法石が一つ消えていると。

カラコロとドアベルの音を響かせ小鞠が店内に足を踏み入れると、「いらっしやいませ」と声がした。

だがすぐに「おかえりなさいませ」と訂正した言葉が飛んでくる。そして小鞠の後に彼が足を踏み入れたとたん。

「きゃあ、シモン君。待ってたのよっ」

「追加注文するから早く来て」

ここは相田夫妻の経営する冠奈さん趣味丸出しのメルヘンな喫茶店です。

そしてここ最近、開店から閉店まで女性に埋め尽くされほぼ満席です。

理由は簡単。

シモンたち3人がマスターと冠奈さんのお店で働き始めたから。

「働かざる者食うべからず」とコマリは言っただろう。もつともだと思う。だから働きたい。わたしたちが世話をかけるせいでコマリの家計を圧迫しているだろう。それを少しでも軽くしたいのだ」

いやでもあなたたちが働くってどこで。

パスポートもないし素性を明かすのはなしだよ？

「マスターキクオに直談判した。最初は今の客足ではわたしたち3人のバイト代は払えないと言われたが、わたしはコマリが大学に行っている間は共についていくし、その間はオロフとデイの2人になる。それに慣れぬことで迷惑もかけるだろうから、3人で1人分がいいと頼み込んでみたのだ。コマリと約束した期限は一ヶ月だか

ら、ともかく一ヶ月だけと言ったら最後は笑って了承してくれた。マスターキクオは良い人物だな」

えーと、今さりげなく大学までつきまとうと言いましたか？それにマスターが笑ったのって呆れたからじゃないのかな。そう思ったがすべて一ヶ月の我慢と小鞠は口には出さなかった。

ともかく、それからシモンは宣言どおり大学へ必ずついてくるようになって、従者二人はせめてどちらかでもつれていってください、とシモンに頼んでいたようだが、
「コマリは目立つのがいやだと言っているではないか。わたし一人で充分だ」
と、そこは譲らなかった。

おかげでデイとオロフに恨めしげな目を向けられたけど。
いや、ここは心を鬼にして無視無視無視。

そして3人が働き出して2週間が過ぎ、マスターと冠奈さんのお店はいまだかつてないくらい繁盛している。
もちろんお客様の目当てはシモンとデイとオロフの3人だ。

最初、コーヒ一杯で粘られてマスターが困っていたら、彼らは「わたしたちのためにたくさん注文してください」と1人1人につきこりとお願ひした。
あれは見事だった。
まるでホストのようだったものな。

次の問題は常連客が来辛くなったこと。
店内が女性で埋め尽くされいつ来ても満席では、特に男性の常連客

の足が遠のく。

冠奈さん趣味のメルヘン喫茶にもめげずに来てくれていたくらい、マスターの淹れるコーヒーに惚れこんでくれていただけに、申し訳なさが募る。

だがそれはカウンター席の半分を常に常連客のために開けておくことで解決した。

それでも敬遠する人は敬遠したけれど、しばらくすればこの騒ぎも落ち着くだろうからきつと戻ってきてくれるよ、とマスターも冠奈さんも笑ってくれた。

本当に優しくして素敵な人たちだ。

またシモンたちが働き出してすぐに、女性客の中でもなにやら取り決めができたらしい。

1人一時間。

皆、平等に喫茶店で時間を過ごそうとなったようだ。

おかげでお客様の入れ替わりがスムーズに行われ、シモンたちの「たくさん注文してね」お願いも功を奏してか、マスターによれば今月の店の売り上げは、信じられないほど伸びているということだった。

「小鞠ちゃん、ぼんやりしているとシモンさんを横から誰かに奪われたりするかもよ」

小鞠がお客の去ったカウンターを片付けていると冠奈が側ににじり寄ってきた。

冠奈は目で女性客につかまっているシモンを指す。

見れば仕事帰りらしい綺麗なお姉様方のテーブルで手を握られている。

はあ？何やってるの。

ここは喫茶店であってホストクラブじゃないのに。
あ、テディとオロフも呼ばれた。

「あら、小鞠ちゃん眉間に皺　　なんだかんだ言っても実は気にな
ってたのね、シモンさんのこと」

「ここはホストクラブじゃないって後であの人たちにビシツと言っ
ておきます」

「え？怒ってるのってそっち？やだもつ、小鞠ちゃんってば。よく
見なさい。あれは手相を見てるのよ。まあ、ああやってシモンさん
たちの手を握りたいんでしょうけどねえ」

よくよく見てみれば確かにお姉さんの一人がシモンの手相を見てい
るようだ。

「生命線」や「金運」という言葉が聞こえてくる。

金運はそりゃあるだろう。

異世界の王子様だからね。

なんてっ たって金山持つてるらしいし。

ハ、と乾いた笑いを浮かべる小鞠に冠奈はなぜかがっかりしたよう
に首を振っている。

カウンターの向こうで菊雄までもが笑ったため、彼女は問うような
目を向けた。

「なんですか？マスターも冠奈さんも」

「シモンさんにもっと頑張らなきゃ駄目って教えなきゃいけないわ
ね」

「小鞠、今週末は大学の文化祭でバイトは休むってことだったか、

あの3人はどうなんだ？一緒に行くのか？」

「ええ？3人は関係ないですよ」

「大学の文化祭なんて若いもんの祭みたいなものだろうか？彼らの国とはまた違った雰囲気だろうし案内してやったらどうだ？」

「やです。あの3人といいたら目立つし」

ミネ先輩とも話せない。

シモンとのが知られた次のゼミで先輩に会ったとき、すっかりシモンを彼氏だと誤解していた。

彼氏じゃないですと否定したけれど、先週のその時も、一昨日のゼミもシモンがくっついてきたため誤解されたままだろう。

小鞠の返事に菊雄が渋い顔になって溜め息をついた。

「日本の文化を学びたくて留学してるのに 小鞠、おまえ彼らをどこか日本的な場所に連れて行ったりしたのか？」

「へ？」

「へ、じゃない。バイトをしなくては食べていけないほどの貧乏留学生者なのだから、おまえが協力して日本のことを教えてやらないでどうする。知り合いもいない日本で偶然親切にしてくれたおまえを頼るしかないと言っていたぞ。小鞠、彼らが日本にいる間は最後まで面倒みてやれ。それが拾った者の務めだ」

あの、それはワンちゃんネコちゃんを拾ったときの言葉に聞こえます、マスター。

彼らは人間ですし拾ってませんから。

どっちかっていうと勝手に押しかけて家に住みついてるんですって

ば。

こう言えればいいけれど、さすがにマスターたちに現在彼らと絶賛同居中です、とは言えてない。

日本の文化を学ぶため一ヶ月だけ彼らは日本に滞在する、とマスターと冠奈さんに話してあるだけだった。

(なんで貧乏留学生とかわたしが親切にしたとかって話になってるの?)

考えられることとしては自分が大学でいないとき、ここでバイトしているテディとオロフが二人からいろいろ質問されて、当たり障りのない話で誤魔化した、ということぐらいだ。

そしてそれが妥当な線だろうと小鞠は納得する。

異世界人の彼らにはなかなかの誤魔化し方だけど……。

(なんか、わたしが悪者になってる?)

そして最初は冠奈さんだけだったはずが、すっかりマスターまで3人の味方になってしまってるのはなんでだろう。

「明日バイトは休んでいいから、大学が終わったら3人を連れて近くの寺や神社に連れて行ったらどうだ?」

「まあ、いいわね。寺社仏閣巡りツアー。そろそろ紅葉の季節だし素敵ね」

「放課後は学祭の準備なんですけど 金曜の午後から始まるし明日が最終準備の日ですから」

「なら、やっぱり3人を文化祭に招待してやりなさい」

「ええええー」

小鞠が心底嫌そうな声を出すと菊雄は「わかったね」と念を押した。菊雄に父を、冠奈に母を見ている彼女は二人には逆らえないのだ。

「はい」

店内の女性の視線を集めているシモンたちをチラと見た小鞠だったが、結局は渋々ながら了承の返事をした。

* * *

「大学の祭にわたしたちを招待してくれるのか？」

「うん、よかったら……だけど」

バイトからの帰り道、小鞠はシモンたちを大学の大学祭に誘ってみた。

もちろん本意ではないので、来ないでください、と内心祈っていたけれど、シモンは嬉しそうな笑顔を浮かべる。見えない尻尾がぶんぶん振られているようだ。

「行くに決まっている。いろんな露天や出し物が出るのだろう？小鞠のゼミの友人たちに聞いたのだ」

ああ、そういえば大学で何度も顔を合わせるうちに、シモンってば

なんだかうちのゼミの男の子たちと親しくなってたもんね。

「もちろんコマリに誘われなくとも護衛として付き従うつもりだったが 正式に誘ってもらえたのだ。その日は護衛としてではなく パートナーとしてエスコートさせてもらおう」

「いいえ、エスコートはけっこうです。そもそも学生がやる素人なお祭で、貴族様の社交界とは違いますから。 舞踏会とかもないです しね」

目の前のシモンを見てアハハと疲れた笑いを浮かべた小鞠は、こっそり溜め息を吐いた。

「そっ、来るの……」

小鞠のぼそりとした咳きを聞いたティとオロフは、主の浮かれようと彼女のやつれた表情を見て、それぞれに苦笑を浮かべた。

「信じらんない。あんな女のどこがいいのよう」

一気に中身を煽った満留は空になったグラスをダンッと強くカウンターに置いた。

彼女の手首で派手なブレスレットが安っぽい音を立てる。

「おーお、荒れてんなあ、満留。つかペース早くね？」

そんな彼女の隣にピアスだらけの男が立った。

深く胸元の開いた服からのぞく満留の豊満な胸を見てから馴れ馴れしく肩を抱いた。

横目で男を見上げた彼女はフンと鼻を鳴らす。

「うっさいなあ。これが飲まずにやっつけられるかってのよ。絶え対わたしの方が可愛いのになんでなびかないわけえ？あんのクソ外人っ」

「へえ、何？次は外人狙ってんの？」

「だってお金持ちっぽいもん。なんかあ、よくわかんないけど最初見たとき付人っぽいのがついてたしいく、話し方も。顔だっすっごくかっこいいんだから。わたしにつりあうのはあのくらいの男なの。絶対絶対絶え対っ、わたしのものにしてやる！」

「外人ってあつちはでかいけどガッチガチにはなんねえって聞いたことあんぜ？俺の方がイイんじゃない？」

「そんな話どうでもいいわよ。なによりこれはわたしのプライドがかかっているの。色白の肌に真っ黒な髪が映えて可憐で笑ったら悶えるほど可愛い〜？どこがよっ、あいつ目え腐ってんじゃないの！？髪なのびる日本人形みたいで不気味だつてえの。てか座敷童い？」

きやはは、と笑う満留はカウンターの奥にいる店員に向かってグラスをもちあげ、「おかわりい」と声をかける。

「日本人形？座敷童とかつてホラーな話？」

「違うわよ。うちの大学で気に入らない女がいるつつつてんの。勉強しかとりえのない真面目ない子ちゃん。教授や先輩からも気に入られててさあ。周りのバカも優しいとか話のわかる奴とかいい子とかおもしろいとか 前っから気に入らないのよ、あの女」

「話聞いてりや人気者じゃん？ ああ、それで満留は気に食わないわけだ。おまえって自分が一番じゃないとやだもんなあ？」

「そうよ。わたしは傳かれないの。男も女も関係なくみんなわたしにメロメロになるのが普通なんだからあ。なのにあの女、同じゼミになったときこのわたしが声をかけてやってんのに喜びもしないのよ。あつたまきたのよねえ。だからあの子の憧れの先輩にちよっかい出してやつたんだあ」

んふふ、と満留は意味ありげに笑い新しく出されたグラスを手を取った。

「女に人気なだけあってあれもいい男なの。あんたよりうまかったわよう？」

「なっ……に言ってんだよ。俺のが」

「キースう。けっこつ腰にきたんだあ」

「なんだ、キスカよ」

「他にもあ？カーモ」

「やったのか？」

「んー、もうちよつとお？」

「もうちよつと？やってねえのか？」

男が眉を寄せるのを見て満留は満足そうに微笑んだ。

「そうそう、普通はこうよねえ。わたしの言葉に一喜一憂したりい、悩んだりい。これが快感なのお。ふふ。あんたのおかげでちよつと気分よくなつちやった。お礼、したげよつか？うーんと濃厚なやつ。お・く・ち・で」

彼女の言葉に男の顔に下品な笑みが浮かぶ。

「なんだ、結局はここに男漁りにきたのかよ？大学じゃ清纯ぶつてるみてえだけど、おまえ相当好きだもんなあ。満留の本性知ったら泣く男いんじゃない？」

「そおーんなへマしないもおんだ。ていうか、うちの大学のバカっ
ていい子ちゃんが多いから、こーんな店に来ないって」

言いながら満留は男の腰に腕を回した。

「行こっ」

二人してカウンターを離れる。

鼓膜に突き刺さるほどの騒音の中、満留がいたカウンターの隣で頬杖をつく者がいた。

パーカーのフードの奥から楽しそうな笑い声がする。

「やっぱり股のゆるい女。でもあの様子じゃなんか仕掛けるかも便乗するかなあ」

声は音楽にかき消された。

フードを脱ぎながらカウンターを離れていく。

満留の残したグラスの中で氷がカランと音を立てた。

大学祭最終日、小鞠はなぜかシモンにゼミの友人を彼から紹介されていた。

「コマリ、彼らは順にユウタ、マサキ、タクトという」

もちろん知ってます。

というよりあなたより彼らとの付き合いは長いですが。

いつものごとく内心でいろいろ突っ込む小鞠は小さく頷く。

「わたしにはコマリをエスコートするという重大な役目があるが、彼らとも緊急の議題が持ち上がったのだ。なのでしばらくわたしは席を外す。すまない、すぐに戻る」

「おう、佐原。ちょっとシモン借りるぞー」

「期待しとけ」

「ばっちり教育してやるからな」

期待とか教育とか意味がわからないけど。

まあいいや。

友よ、ずっとシモンを連れ去っていてください。

そういえば従者二人、あなたたちは主を追っかけていけないわけ？

小鞠がテディとオロフを見上げれば彼らは一様に目をそらした。

「コマリ様。さ、シモン様が戻るまで大学内を散策いたしましょう」

「大学祭とは賑やかですね」

なに、この明らかに話をそらしました的な雰囲気は。

逆に気になるじゃない。

「あの……シモンは彼らといたい何を？」

「えっ！？いや、なんでしょうね。テディおまえ、知っているか？」

オロフ、嘘が下手すぎる。

小鞠が呆れた目を向けるとテディも額を押さえた。

「オロフ、おまえ後でシメる」

「え？なんで」

「いいです。聞かれたくなかったんですね」

「ええ？どうしてわかったのですか？」

オロフがそう言ったとたんテディが大きく溜め息を吐いた。

オロフって嘘がつけないんだなあ。

「うちのゼミの模擬店に行ってもいいですか？今日は当番じゃないですけど様子を見たくて」

二人が頷いたため小鞠が歩き出すと、彼らは両サイドに別れて彼女を挟んだ。

ああ、またこれか。

こんなカツコイイ人たちに挟まれて人様の視線を集めるのはやっぱり慣れない。

「あのお、どうしていつもわたしを真ん中に？」

「シモン様より命に代えてもコマリ様をお守りするよつ」と厳命されておりますので」

テデイが教えてくれた敵命とやらに小鞠は嘆息する。
命に代えてもってなんでよ。

「守っていただけるのはありがたいですがわたしは一般人ですし、命を狙われるようなことはありません。仮に事故に巻き込まれることがあったとしても、二人の命を犠牲にしてまで助けられても嬉しくないです。それでもわたしを守ってくださいとおっしゃるのなら、二人とも自分の命もきっちり守ってください」

小鞠は二人が無言なため不思議になって彼らを見上げた。
あれ、二人ともすっごい驚いた顔してますが。
緑と茶色の視線が痛いです。

「わたしどものような従者のことまで考える必要はありません、コマリ様」

「我らが主の後となる方をお守りするのは当たり前のことです」

「そんな当たり前前、クソ食らえです」

小鞠が言ったとたん「クソ!？」とオロフが絶句した。
テデイは顔を顰めている。

「すみません、育ちが庶民なもので口が悪いんです。で、庶民だからやんごとなき身分の方の立場なんてわかりません。ていうか、他人の命を犠牲にしても自分は守られて当然って思ってる人間の気持ちなんてわかりたくもない。命はその人のものです。誰かのために散っていい命なんて一つもない。わたしは自分の命を大切にしない人は嫌いです。これがわかっていただけなのであれば……ああ、というより最初からわたしに護衛は必要なかったですね。お二人はいますぐシモンのところへ行ってください。あなたたちが守るべき

は国の大事な王子様でしょう?」

二人の返答に小鞠はキレていた。

確かに世の中には守られなきやいけない人はいると思う。

シモンのような一国の王子様がそうだろう。

そのため彼が、守られるのを当たり前に生きてきたのだというのはわかる。

でもだからといって立場ある人間が他人の命を軽んじていいはずはない。

そしてテディとオロフもそれを当たり前に受け入れる必要はないと思うのだ。

「それはできません」

二人が同時に言ったため小鞠は立ち止まってテディとオロフを睨みあげた。

「わたしは命に代えてもわたしを守れて命令したシモンの言葉が信じられないと言ってるの。そしてそれを疑問もなく受け入れるあなたたちも。わたしとあなたたちでは生きてきた環境も文化も何もかも違うから、見解の相違があつて当然だと思う。でもわたしにはあなたたちの言うことが理解できない。わたしを守るために誰かが死ぬなんて絶対いや。だから護衛なんていらない」

きつぱり言い切つて小鞠は彼らの脇を通り過ぎた。

だが腕を掴まれる。

振り仰ぐとオロフが真面目な顔で彼女を見下ろした。

「コマリ様の思いはわかりました。ですが我らには我らの矜持があ

ります。簡単に命を投げ出すのはまた違うのです。守りたいと思う方だからこそ自分の命をも懸ようと思う。わたしはそのような方に出会えたことを嬉しく思います」

「コマリ様、シモン様は決してわたしたちの命を軽んじているわけではありません。シモン様はわたしの体調が優れないと気づくと、すぐに休めとおっしゃってくださいるようなお優しい方です」

「わたしも訓練中の手合わせで腕を怪我をしたときに、よくきくと噂の傷薬を用意してくれました。たいしたことはないと伝えても、護衛はいいと言って無理やり休まされましたよ」

テディとオロフの顔に当時を思い出すような笑顔が浮かぶ。それを見て小鞠は気づいた。

(この二人、シモンのことがすごく好きなんだ)

従者だとか護衛だとか臣下だとかそんなものを抜きにして、シモンという人を好きだから仕えているのだろう。

日本では家臣は家に仕えるからそのイメージが強いが、もしかすると異世界の彼らの国では人に仕えるのかもしれない。

小鞠は自分の中にあるシモンという人を思い返した。

王子様だから命じることに慣れた人の言葉遣いではあるけれど、偉ぶったところや傲慢なところはない。

二人の言うように優しいとも思う。

気がつけば街中ではさりげなく車道側を歩いているし、スーパーで買い物をする時荷物全部持とうとするし、慣れない文化に失敗する彼について小言を言ってしまう自分の言葉をいつも真摯に聞いてい

る。

(家じゃテディとオロフが止めても率先して家事とか手伝ってくれ
るし、しかもそれが楽しそうだし……どっちかっていうとわたしの
想像する王子様らしくない?)

王子様なんてもっと偉そうにして、庶民と話すのは口をきいてやっ
てると思ってるくらいで……そんな俺様人間を小鞠は想像していた。

(けどシモンってわたしの友達とかとすんなり打ち解けちゃった)

今日なんてゼミの男の子と仲良く4人でどっかに消えちゃったし。
あのときの顔なんだか子供みたいだった。

そう思っつて小鞠はふ、と笑う。

「深く考えずにすぐに怒ってしまうのは、わたしの悪いところだっ
てわかってるつもりなんですけど　お二人の大好きなシモンを悪
く言っつてごめんなさい」

「いいえ。わたしはコマリ様をお守りすることができて嬉しく思い
ます」

「え?」

「わたしもオロフと同様でございます。シモン様の愛魂の相手がコ
マリ様でよかったです」

二人ともどうしてニコニコしてるんだろう。

「そこはありがとうと言うところなのかな。あ、でもやっぱりわた
しを守るために怪我とか、死んじゃうとかって絶対嫌です!シモン
にも命に代えてもって命令は撤回するよう言わなきゃ。誰の命も

大事なの!!」

小鞠がジロと目を向けると二人は顔を見合わせ、次いで噴出しながら「はい」と頷いた。

模擬店に顔を出すとゼミの友達が気軽に声をかけてくる。

「コマちゃん、手伝いに来てくれたの？助かるう」

けっこう繁盛しているかも。

今日、日曜日だから人多いし、昨晚少し冷え込んだから温かいもの食べたいもんね。

おでんの具財足りるのかなあ。

なんなら買出しに行くと言ってみよう。

小鞠が女の子たちに近づくと後ろで、

「あつ、テディ。昨日、テディの教えてくれたように客に呼びかけたら、売り上げが伸びたって聞いたけど、今日も客寄せしたいからちゃんと教えてくれよ」

「オロフ、悪い、ちよつとこれ持つの手伝って」

テディとオロフも呼ばれている。

昨日、模擬店の当番だったとき彼らも手伝ってくれたからか、皆が二人に頼っちゃってますけど。

テディは異世界で王子であるシモンの補佐をやっちゃってるので、時おり礼状だとか挨拶状だとか作成するらしくて、人受けする言葉を考えるのなんてお手の物らしい。

で、オロフは騎士だけあって体も鍛えてるから力持ち。

お茶の入ったダンボールを4つ重ねて持ったときは驚いた。

二人ともお伺いを立てるように見つめてこないで。

庶民が刺客に狙われるとかなないからね。
だから護衛の必要は本当にないんですって。

小鞠が頷くと彼らはそれぞれに得意分野を役立てるために、彼女の友人たちを手伝い始めた。

「コマ、今晚の打ち上げ行くんだよね」

いきなり声をかけられビクついた小鞠だが、振り返って爽が立っていたため笑顔になった。
人影に隠れて気づかなかったようだ。

「あ、ミネ先輩いらしてたんですか？えっと打ち上げですよ。行きますよ？」

「彼氏持参？」

「彼って……まさかシモンのことですか？何度も言ってますけどあの人はただの友達で彼氏じゃないです」

「でもあっちはコマのこと気に入ってるよね？迫られてほだされちゃったりとかないの？」

「迫っ……ないです、ない！ないないないっ」

ぶんぶんとう首を小鞠が振ると爽はふーんと腕を組んだ。

「それってどつちの意味？ほだされてないってこと？それとも迫られてないってこと？」

「どつちもないですってば」

「へえ、コマはともかく彼、意外にヘタレなんだ。外人つてもっと

がanganいくのかと思ってたけど。ね、コマ？」

そこでわたしに質問しないでください。

ミネ先輩を含め何人か片想いの相手はいましたが、告白ができなくてこれまで彼氏もできてないんですから。

（ヘタレっていうならわたしだと思　あれ？いまコマはともかく
って言われた？）

はたと気づいて小鞠は爽を見つめた。

（それってミネ先輩はわたしのことをヘタレだと思ってるというこ
と？）

で、ヘタレと思われてる理由って……。

（き、ききき気づかれてる！？ねえ！もしかしてわたしの気持ち気
づかれてる！？）

ん、と爽が自分を見下ろしてきたため彼女は慌てて目をそらした。
聞けない。

（わたしの気持ちに気づいてますか？なんて質問できるわけないっ
！）

あたふたとろたえている小鞠はツンと頭をつつかれた。

「コマ。打ち上げ行くならさ。お願いがあるんだけどいいかな？」
「え、はい。なんですか？」

「実は俺、ちょっと風邪気味でさ。体調が万全じゃない分いつもよ
り酒の回りが速いかもしれないんだよね。飲みすぎないよう自分で
気をつけるつもりだけど、ヤバくなったらフォローしてもらってい
いかな」

「フォローですか」

「うん。もしかして気持ち悪くなったりするかも。盛り上がってる
とき水差したくないし、こっそり介抱してくれないか？ コマって
いつも飲み会じゃ意識しっかりしてるし、周りへの面倒見もいいか
ら頼れるかなーってさ」

「駄目？」と爽に小首を傾げて尋ねられた小鞠は思わず頬をおさえ
た。

(くう、かつこ可愛い。まさにアイドル！素敵すぎるっ)

彼女はグと小さくガッツポーズを作り爽へ大きく頷いた。

「任せてくださいっ。ばっちりミネ先輩を守ってみせます」

「ホント？ありがと。じゃあ今晚は俺の側にいてくれよ んじゃ
ちょっといま忙しそうだから、売り子手伝ってくるよ」

ちよつとこれ、いいんですか。

なんかもう棚から牡丹餅、イツツミラクルな展開に。

皐月さんが積極的だから彼女になびくんじゃないかって思ってたけ
ど、先輩ってそこの男みたく彼女のお色気に惑わされる男じゃな
かったんですね。

(ああ、ここからミネ先輩にお近づきになれないかなあ)

小鞠は1人ニヨニヨとして働く爽を見つめる。

それから彼女はカバンを置いて模擬店を手伝い始めた。

もちろんそれは忙しそうな皆を手伝うためだったが、爽と話ができるからという下心もあったのは言うまでもない。

シモンは大学の近くにあるワンルームマンションの一室で、男3人から説明を受けていた。

狭い室内の小さなテーブルの上には彼が見たこともないものが並ぶ。

「こんなもので本当に子どもができなくなるのか？」

シモンは個別にパッケージされたうちの1袋を指に摘んだ。

コマリと暮らすようになって、こちらの世界ではほとんどの物が「びに」るぶくろ」なるものに入っていると知った。

食べ物特にそうだ。

「とれい」に入った肉や魚が「らっぷ」という「びに」る「に包まれている。

「こんな薄っぺらなびに」るをどう使う？」

シモンが側にいる3人に目を向けると彼らは、はぁーと溜め息を吐いた。

「本当にコンドームも知らねえ」

「いままでナマしかしたことないって羨ましすぎる」

「どんだけ俺様かと思ったもんなあ。くそっ、顔か？顔なのか？」

ふむ、これは「こんどーむ」というらしい。

中に何か入っているようだ。

この包みを開ければ正体がわかるだろうか。

シモンは袋を開けて丸いそれを取り出した。

「これは……「ごむ」というのに似ているな。ただ穴が開いていないが」

「アホかつ！穴が開いてたら意味ねえだろ。つかゴムだったの」

テデイが聞いたら即座に牢へぶち込めと言いかねない物言いだ。

だがいままで自分にここまで親しげに話してくれる人間などいなかった。

それにこれは悪意があるのではなく、いうなれば仲間内で打ち解けた証ともとれるじゃあないだ。

(気の置けない友というのは心地よいものだな)

「いいか、ちゃんと聞けよ」と言ったマサキの説明によればこれは男が使用するらしい。

くるくると巻いてあったのを伸ばしてみたシモンはなるほど頷いた。

男性器を「ごむ」で包むということか。

確かにこれならば射精しても「ごむ」で阻まれ妊娠を防げるだろう。カツレラ王国には不妊の薬湯があって、それを男でも女でも、どちらか片方が飲み続けていれば妊娠の可能性はないのだが、それを説明するとなると異世界の話をしなくてはならないだろうと黙っていたが。

(こちらの世界ではこのようなものを使わなければならないのか。なんとも面倒だな)

しかしなかなか薄いものだとコンドームを引っぱりながらシモンは彼らに質問する。

「こんなに薄くて破れないのだろうか？」

「ああ、爪で傷つけてとかあるけどな。そのときは『愁傷様って感じ？』」

「やー、でも破れてたってわかったときに相手に薬を飲んでもらったらいんじゃないかね？」

「俺らの年で子どもとかまだありえないもんな」

「ありえないのか？ちょうど良い年齢では」

「はあ！？俺らまだ就職もしてねえし金もねえっての。何より来年、社会人になってからも遊びたいじゃん」

「だよなあ。子どもはないわー」

3人が一様に頷く。

どうやらこの世界の男の結婚適齢期はカツレラとは違うようだ。

とはいえカツレラでちょうど適齢期といわれる自分は、彼らより2、3歳ほど年齢が上なのだが。

「ユウタがいま薬があると言ったが？それを飲めば子どもはできないのだろう？」

「彼女に子どもはいらねえからピル飲んでくれって？」

「で、俺らはナマでやれて超ラッキー？……って言えるかボケえ！」

いきなり吠えたタクトがダンっとテーブルを叩いた。

「わかったぞ、シモン。おまえがいままでナマだったわけ。相手の子に薬飲ませて自分はウハウハっ！」

「ピル代もバカにならないのに女に負担させたのかっ！！いや、させてたんだろう」

「その顔でたぶらかせば女なら何でも言うことをきくだろうからな。

なんつて最低な男だ！羨ましすぎるぞ、普段はすつとぼけたのほほんシモンのくせに」

「え？いや……」

自分が薬湯を飲んでいたのだが。

それにすつとぼけたとか、のほほんシモンなどという妙な渾名をつけないでほしい。

シモンとて男なので人並みに性欲も興味もあった。

愛魂の相手にめぐり合えないまま時間が過ぎ、処理として女を抱いこともあったが、最近ではそれも虚しいだけだった。

誰を抱いても満たされず愛魂の相手を探すことに精力を注ぐようになって、とうとう異世界にいるとわかったときはどれほど嬉しかったか。

魂の対となる相手にめぐり合えないまま生涯を終えた先祖もいる。

そのような場合、普通の女性と結婚したらしい。

また愛魂の相手が若くして亡くなり再婚した話もある。

彼らは愛魂の相手と結婚せずとも幸せに暮らしたとシモンは聞いているが。

「わたしは魂の対　　コマリ以外の女性と子をもうける気持ちはなかったのだ。だがわたしにも性欲はあって……だがそうだな。最低と言われればそうかもしれない。反省している」

「おまえって……なんか調子狂うよなあ」

「真面目ってかやつぱすつとぼけてるつつつか。もつと遊んでるのかと思つたら佐原一筋だしさ」

「その魂の対つてのだからか？よくわかんねえけどそれってスピリ

「チュアルな話？まあ出会えてよかったじゃん」

3人が顔を見合わせて笑いあう。

「日本に来た当初助けてもらったんだっけ？佐原らしいっちゃらしいか。面倒見いいし突っ込み激しいけど実は優しいだろ。顔も悪くない」

悪くないだと。

マサキ、おまえの目は節穴か。

あんなに可愛いのに。

「あー、真面目そうに見えて気さくだしけっこう人気あるよなあ。の割りに彼氏いねえみたいだから好きな奴でもいんじゃないかなって噂だけど」

やはり男に人気なのか。

そこは要注意だ。

好きな男……盲点だった。

コマリには好きな男がいるのだろうか。

「シーモーン、さっさとモノにしないと佐原に彼氏できるかもよ？あいつの好きな奴はおまえじゃねーよなあ。他の女みたくおまえに見惚れてないし、それどころかおまえたまに怒られてるだろ」

コマリがあまりに可愛いので見惚れてしまうのだ。

そのため話を聞いているのかと怒らせてしまう。

彼女に見惚れない方法でもあみだせば回数は減ると思うのだが。

ニシシとユウタが笑う側でマサキがシモンに指を突きつけた。

「つまり佐原はおまえの顔になびかない。いままでどおりにはいかないってこと覚えとけ」

勢いに圧されて頷いてしまったシモンに彼は言葉を続ける。

「だがしかしつ、佐原はおまえにだけは素を見せてるとみた。佐原がシモンに怒ってるのを見たときは驚いたもんな。俺らクラスメートには怒ったことはなかったから。しかもおまえのこと嫌ってるわけじゃなさそうだし」

「意識はされていないが気を許されてるってのは大いに勝算はある……だろ、たぶん。てことで、ここらでガツンと男を意識させる」「女は秀囲気に弱い。そこを狙って攻めていけ！で秀囲気にのまれていると思っただときは一気にたたみかける。いいな」

確かにコマリにはまだ欠片も意識されていないように思う。

風呂上りに半身裸でいると赤くなって服を着るよう叱られるが、あれはただ異性に慣れていないだけだろう。

それにユウタの言うように、女性は花や星空を見てうっとりとする。そういうときの女性はものにしやすかった。

うんうんとシモンは彼らの話に大きく頷く。

「ま、あっちの経験は俺らよりおまえのほうが上だろうから多くは言わねえけど」

「おまえの予想じゃ佐原、男経験なさそうだって言ってたじゃん。だからゼリーつきとかローションとか用意してみた。うまくいったとき使え」

「ああ、そうそうこれ、ついでにやるから観とけよ。女が望むエッチするのはこんなだってよ。前に彼女に半ば無理やりもらったDV

「D」

ゼリーとは食べるものではなかっただろうか。

それにローションはコマリが風呂上りに使っている美容液のことだろう。

「えっち」とは言葉からしてわからないし、そのシャシンという裸の男女の絵がついた薄い箱はなんだ。

シモンが眉を寄せているにもかかわらず、彼らはシモンのカバンにそれらを押し込めた。

「よし、講習おわり」

「お、ちょうど俺らの当番の時間じゃね？」

「おー、大学戻んべ。行くぞ〜シモン」

彼らは彼らなりに自分を思っているんな品を用意してくれたようだ。

（ともかくこちらの世界では女性に負担をかけぬよう、男がすべて気遣うものなのだな）

そうは見えなかったが実は意外に女性を尊ぶ世界なのかもしれないならばこちらの世界の男と引けをとらないためにも、いままで以上にコマリを大切にしなければ。

シモンは礼を言って部屋を出た。

「今日、打ち上げあるじゃん。シモン行く?」

「ウチアゲ?」

「んー? 飲み会。学祭お疲れ〜でうちのゼミの奴らと酒飲みながら語り合いましょって感じかな」

「コマリが行くなら行く」

大学へ向かう道すがらシモンたちは並んで歩く。

コウタの質問に彼が答えると3人がそれぞれに反応を見せた。

「ははは、おまえの世界の中心は佐原か。すげーな、俺そこまで彼女のこと思えっかな」

「その熱意に佐原も打たれんじゃねえの?ま、頑張れ」

「や、間違えたらストーカーだぞ。ほどほどにしとけよ」

すとーかー。

また知らない言葉だ。

その言葉を言ったマサキ尋ねれば、特定の人間、つまり自分の場合は「コマリ」につきまとい行為をすることだと言われた。

「佐原が嫌がってなければいいんだろっけど、おまえけっこう帰れとかついてくるなって言われてね? 行き過ぎたら嫌われんぞ」

「そういうものか……ふむ、ほどほど わかった。参考にしよう」

「えー? じゃあ今日の飲み会こねーの? シモンと飲み比べしたかったのに」

タクトが残念そうな顔をした。

どうやら彼は酒に強いらしい。

「いや、コマリが行くのなら行くというのは変わらない。コマリと距離をとるようにしておけば問題ないだろう?」

「ほどほどをわかってんだかわかってないんだか……参加費、先払いつつたぞ」

溜め息交じりのマサキの言葉に金が必要だとわかってシモンはまずいと思った。

またコマリに負担をかけてしまう。

(だが何かあったとき側にいなければコマリを守れない)

異世界に来てすぐ、リクハルドより上質の魔法石が一つ消えたと報告を受けている。

誰の仕業か何が狙いかはわからないが、リクハルドによれば腕のいい魔法使いならそれを使って、なんとかこちらの世界に干渉できると言っていた。

その場合自分が狙いであればいいが、もし愛魂の片割れとなるコマリを狙っているのであれば、彼女に危険が及ぶ。

だからいま自分かティカオロフの誰かが、必ずコマリの側にいるようにしているのだ。

思考に耽っていたシモンだがふと、立ち止まって背後を振り返った。

(いま……なにか 視線?)

気のせいかな。

「おーい、シモン何やってんだ?」

「ああ、すまない。いま行」

先を進んでいた友に向き直ったシモンだが、いきなり背中にのしつと何かが乗っかってきたため、とっさにそれを掴んで地面に投げた。

勢いのまま足で踏みつけかけ、

「アタタ……えろう、すんません」

気の抜けた声に動きを止める。

無精髭を生やした男が地面に転がり、情けない顔でシモンを見上げた。

「風にのってこつちからええ匂いしてくるなあ思てついふらふらとでも腹減ってよるけてしもたんや。あんちゃん、手え離してんか。捻られて痛い」

「わー、シモン何やってんだよっ」

「てかおまえすげえなあ！何いまの！」

「一瞬で人が投げられるのなんて初めて見た」

友人が駆け寄ってくるのに目も向けずシモンは男を見下ろす。

半身を起こしてシモンにひねられた腕をさすっていた男は、彼の視線に気づいたのか顔をあげてへらっと笑った。

脱力笑顔にまたしても気が抜けそうになったシモンだが、警戒を緩めぬままに一応謝罪する。

「すまない。暴漢かと思つてしまった」

「ああ、ええよ。悪いのはこつちやし。にしてもきみ、強いなあ。

柔道でもやってたん？外人さんやのに日本語もうまいし。きれいな標準語やなあ」

「ヒョウジュンゴ？」

立ち上がった服の汚れをはたいていた男はシモンの質問に首を傾げる。

「標準語でわからん？ほな、関東弁？あ、ちなみにボクのは関西弁な。生粋の大阪人やで。ボケとツツコミの天才県民……や、間違おた、府民か。ってこんな言つたかて、ボク実は10代半ばで欧州行つてもうてんけど。やから英語ぺつらぺらやで。あとおフランス語とドイツ語もできるし。どうや？久しぶりに母国語でしゃべつてみいひん？きみ、どこの国の人？ナイスチューミーチュウの英語圏？」

シモンはこの世界はどうやらコマリの話す日本語以外にも、多言語がある彼女と一緒に大学に行くようになって知った。

自分と似た容姿の者がいたためコマリに尋ねれば留学生と教えてくれ、話す言葉も違つと聞いた時は言語が統一されている自分たちの世界と違つたため驚いたものだが。

首飾りのおかげでどの国の言語も理解できるらしいとは、「てれび」で違つ国の言葉を聞いてわかつた。

また自分が話す言葉は聞く側の母語に変換されて耳に届くようだ。

コマリとスーパーの帰りに異国の人間に道を聞かれたことがあつたが、あのとき後からコマリに、相手の話す言葉は英語なのにシモンの話す言葉は日本語に聞こえ、しかもそれが相手に通じていたのは吃驚したと言われた。

(いま余計なことを言えばまずいだらうな)

おそらくこの男の話し言葉は方言でもあるのだろうが、シモンにはマサキたちの話す言葉もこの男の言葉もすべて同じように母語で聞こえている。

「エイゴ」や「ふらんすゴ」や「どいつゴ」の違いもわからない。

「日本の文化を学びたくて留学している。言葉も日本語でお願いしたいが」

「そうなん？えらい勉強熱心な人やなあ。ああ、もしかしてこの先にある大学に留学中？で、こつちの子らは学校のお友達か。な、きみら今日、大学のお祭なんやる？電柱の張り紙見てん。お店出してる？飲食系やったら嬉しいなあ。ボクおなか減ってぺこぺこなんや。できればご飯奢ってえな」

瞬間、シモンは友人たちに腕をつかまれその場を走り去ることになった。

「あつ！待つて。逃げんでもええ……」

男から引き止める声が聞こえる。

「シモン、振り返るなっ！たかられる。あの笑顔に騙されんなよ。

おまえ人がいいからな」

「いきなり奢れっすっげえ凶々しい。浮浪者か？パーカーもジーンズも、んな汚れてなかつたけど」

「ああいうのは一回奢ったら最後、つきまとわれて骨までしゃぶりつくされるんだ。関わらず逃げる」

いや、何もそこまで言わなくてもいいのでは。

確かに怪しい人物ではあったが殺気は感じなかった。

だがあの場を連れ去ってくれたのは助かったか。

人で賑わう大学内を駆けぬけて模擬店に辿り着いたときには、友人3人はゼエゼエと肩で息をしていた。シモンは彼らに礼を言う。

「すまん、助けられた」

「やー。別に……ってかおまえ超人？息切れてねえじゃん」

「柔道の達人だし鍛えてんじゃね？あれ1本背負いだろ。てか、あー、疲れた」

「実は脱いだらマッチョか？」

「ジユウドウ」とはなにか武術のようなものだろうが、「まっちょ」とはなんだろうか。

この世界の言葉は本当によくわからない。

母語にない言葉はそのまま変換せずに聞こえてくるから困りものだ。

曖昧に笑ったシモンは店内を見回しコマリたちの姿がないことを確認する。

祭をどこかで楽しんでいるのだろうか。

シモンに気づいた小鞠の女友達が、

「シモン君。コマならデイ君とオロフ君と買出し〜。ごめんね、ずっとこっちを手伝ってくれてるんだあ。一緒に学祭まわれないよねえ」

と申し訳なさそうに伝えてきた。

買い物か。

迎えに行こうかとシモンが意識を集中し呼び合う対の魂を探しかけ

た。
と、そこへ。

「見いつけたあ」

気の抜けた声に振り返ってシモンは反射的に身構えていた。先ほどの男が立っていたからだ。タクトとユウタが「ぎゃあ」と声をあげる。

「おーいい、マジでヤバイ奴かあ？」

シモンの隣でマサキが構えるのをシモンは手で制した。

「皆には手出しさせない。何用だ？」

「だあかあらあ。ご飯食べさしてって言ったやん。おでん屋さんかあ。たこやきちゃうねんな。まあええわ。大根とこんにやくと卵は絶対入れてな。好きやねん」

「マサキ、彼に食べ物」

「ああ？でも」

「それを食べたら帰るよう説得する」

「……はいはい。わかった」

「悪いな」

シモンがマサキの肩を軽く叩くと彼は笑って肩を竦めた。

マサキからおでんの入った器を受け取りシモンは男を目で呼んだ。

「あつちへ行こう」

「ほんまにおでんくれるん？やー言うてみるもんやな。持ち合わせがあんまりなくて……助かるわ。ありがとう」

二人で少し歩きモニメントの下にある石垣に腰を降ろすと、シモンは男に器と割り箸を差し出した。

彼は笑顔で受け取り「いただきます」と手を合わせ、ほくほくと大根を頬張った。

「うまあー。腹に染み渡るう。朝も昼も抜きやってん」

「そうか。それを食べたなら帰ってくれ」

「Nein・Ich komme nicht zur?ck・)
いやや。帰らへん」

「食べ物ほしいと言ったからこうして渡しただろう」

「J'aime rais vous parler・(きみと話したいねん)」

「わたしと話？」

「そう。でもその前にいゝ、もう一回やってみよか。H?ren Sie es bitte……Dies ist deutsche・(聞いてや……これドイツ語な)C'est fran?ais・(これはフランス語)　ほんでいま話してんのが日本語の関西弁。さっきも三ヶ国語混ぜて話してみんけど全然、普通に聞いてたなあ。So,this is English・(で、これが英語)Do you understand all language

ages? (きみ、全部の言語わかつてるみたいやね?) あんちゃん、いつたい何者や? ボクみたいに語学堪能やねんっちゅうボケはなしやで。こんなけ覚えるんけっこう苦労したんやし、外人がいくら耳ええいうても、同じような奴がごろごろおったら自信喪失してまうわ」

ずずーっと男は器からおでんの汁を飲みうまそうな溜め息をつく。

(しまったな。言語の違いなんて全くわからなかった)

シモンの耳には母国の言葉で聞こえているのだから。

だがこの男に自分が異世界人であると話してしまっていていいのだろうか。

どういう人物か探りたいのが本音だ。答えるはずもないだろうが、とシモンは質問を試みた。

「わたしに誰かと尋ねる前にまず自分が名乗って、何者であるか話してはどうだ?」

「ああ、せやなあ。人に尋ねるときながら自分が名前も名乗らんのは失礼やったわ。ボク、西方澄人いいます。ニシカタ・スミト」

あっさり名乗られて驚いた。

彼の真意が全くわからない。

「あ、けどスミちゃんって呼ぶのは勘弁してや。女の子みたいやる? スミトでええわ。で、何者ってことやけど……んー? その日暮しの根無し草? あ、けど人の家やけど住むトコあるしー、ヒモ、かなあ? ボクいま無職やねん。ちよっと逃げてきてな」

「逃げてきた? 罪人か?」

「罪人つて……さつきも「何用だ」とか言つし、また古風ななあ。犯罪者ちゃうよ。とある団体から逃げた、……というよりとんずらしてんよ、ボク。で、もうずっと隠れてんねん　あー、おいしかった。ごちそうさん」

両手を合わせたスミトは空になつた器を脇に置いて、シモンの鎖骨の辺りを指差した。

「きみの首にぶら下がってるんやと思うけど、えらい力秘めたもん持つとるねえ」

シモンはギクとしながらも顔に出さないよう平静を装う。

しかしスミトへの警戒心を強めた。

何も答えない彼にスミトはほにゃんとした顔で微笑む。

「顔に出せへんかあ。訓練されてんかなあ？じゃあボクがきみに、どこの団体の人？つて聞いたところで素直に教えてくれへんか。ここまでわかるんはあ、ボクのこと知らんから、やつぱりボクが逃げてきた団体の子とちゃうよな。それにボク、昔いろんな団体に顔出したたせいか、そつちの筋ではちよつと有名やねんけど名前知らんかつたみたいし。もしかしてあんちゃん、無所属？」

「やつぱり？その言葉から察するに、最初わたしにのしかかつてきたのは故意だったと言つことか。あの視線はスミトのものだったんだな」

「あはは、なかなかええ推察力やわ。ちよつときみの首のもんに興味があつてん。で、シモン君にお近づきになろうと思つて」

名前を言われてシモンが目を眇めるとスミトは口角を持ち上げた。

ヘラリとした笑顔に敵意は見えない。

「お友達がそう呼んでたやん。で、シモン君。質問の続きやけどきみ、ボクがしゃべった言葉の違いわかってへんのか？あんなけころころ言葉変えてんに、何の反応も示さへんて逆に不自然やねん」

沈黙を続けるシモンにスミトはさすがに笑顔を消して腕を組んだ。

「黙秘権行使されてもうたな。こうなったらズバリ訊くほうがええかなあ？シモン君、きみ」

「あー！シモン君だあ」

スミトの声は舌足らずな女の声に遮られた。

視線を向ければミチルが大きく手を振っている。

こちらの服装は自分たちの国とは全く違うが、ミチルの着る服はいつも男を誘うような体の曲線を強調したものだ。

今日は昨晚の冷え込みで肌寒いのに、どうしてドロワのようなズボンを穿いただけの、太腿から足を出したあられもない格好をしているのだろうか。

靴はブーツだが寒くないのか。

そういえばコマリも男のようにズボンを穿くが、彼女曰く「動きやすい」ということだった。

ただコマリの場合ミチルのような男を誘うような衣服は身につけていないように思う。

さりげなく可愛い。

こちらの衣服を見慣れて思うがそんな印象だ。

自分はコマリのような服装の方が断然いい。

スミトがミチルを見てからシモンに目を向ける。

「あの子きみの彼女？」

「違う」

「そこは即答するんや。迷惑してるってことかな？可愛い子おやん。邪険に扱ったりなや やけど邪魔入ったなあ。しゃあない。また会いにくるわ。この大学におんねやる？ボク、勝手に見つけるし…じゃ、またな。あ、それからおでんご馳走さんってお友達に言うというて」

パーカーのフードを被り、ズボンのポケットに手をつ込んだスミトが、軽い足取りで人に紛れていく。

ほ、と息をついたシモンの元へミチルが走りこんできた。

「いまの誰？お友達？」

「おでんを買ってくれた客だ」

「お客さんとお友達になったのぉ？シモン君っておもしろい」

腰を折って石垣に座る自分をのぞきこんでくるミチルの胸元が際どい。

これはわざとだろうと予想のついたシモンは、溜め息をつきたくなるのを堪えて立ち上がった。

「すまない、用があるので失礼する」

「あ、待ってよう。シモン君、今日の打ち上げ行く？」

「コマリが行くのであれば参加する」

「行くんじゃないのぉ？ミネ先輩行くし」

シモンは思わずミチルを振り返っていた。

「ミネ？ソウのことか？」

コマリからは先輩だと聞いている男だ。

彼の視線を受けてミチルは微笑んだ。

「だってコマちゃんミネ先輩のこと好きでしょ？」

「コマリがソウを？」

「やあぱりい、気づいてなかったんだあ。わたし、そういう勘はいんだよ？ミネ先輩もまんざらでもなさそうだし応援したげよーよ」

「応援？」

「だって二人が両思いならシモン君の入り込む余地なんてないでしょ？男なら好きな女の子のために身を引いて」

「できない相談だ」

他の男にコマリを譲るなどできようはずもない。

ミチルの言葉を遮りシモンは言い切る。

「教えてくれて感謝する」

「え？あつ……」

ミチルを残しシモンは足早にその場を立ち去った。

ここでの暮らしが楽しくて忘れがちだが、コマリとの約束の期限まで二週間を切っている。

今日まで彼女に好きな男がいると考えなかった自分はなんと間抜けであったことだろう。

(せめてコマリに男として意識されなくては)

既にコマリに想われているソウとは違い自分は随分と出遅れている。だからといって彼女に無理強いはしたくないのだ。

強引にカツレラ王国につれていくよりも、自分を好きになってもらえるように。

だが、これまでのようにありのままの自分を見せているだけでは駄目なのだろう。

(ならばどうすればいい?)

好きだと言えればいいだろうか。

こちらでできた友もガツンといけと言っていた。

恋愛に内気なコマリが困らないようにと、愛を告げるのは控えていたが、もはやなりふり構っているときではないだろう。

シモンは意識を集中して愛魂の示すコマリの元へ急ぐ。

自然足は走り出していた。

目の前に立つシモンを見上げ小鞠は急速に頬が熱くなっていくのを感じた。

「デイとオロフと3人、買出しから戻ってきた直後のことだった。同じようにどこかから駆け戻ったシモンに手をつかまれて、なんだろうと目を向けたただけなのに。」

「あ、あの……シモン、いま」

公衆の面前で何を言いやがりましたか。

「聞こえなかったのか？ではもう一度言う。コマリ、好きだ」

とたんに自分と同じように耳を疑っていたらしい周りから悲鳴と野次が飛ぶ。

「こんなところで大告白？」

「恥ずかしげもなく言い切ったぞ。さすが外人……ってかシモンだから？」

「ほらコマ、返事！返事しなきゃっ」

こんなさらし者状態で返事なんかできるもんか。何みんな期待に満ちた目でこっちを見てるんですか。

「おお、シモン。早速ガツンといったか？」

「いや、でもガツンの意味が違うくね？」

「気持ちガバガバでもけじめをつけておこうって男の意気込みだろ。講習の成果かな」

おいこら、そのの3バカども。
シモンのこの奇行はあんたたちのせいねっ。

小鞠は手口とシモンと仲良くなった友人たちを見つめる。

彼らは彼女の視線に気づくとニヤニヤと笑って「返事」と口パクで伝えてきた。

（なんでしたり顔？……もう、いったいシモンに何を吹きこんだの！？）

口をへの字に曲げた小鞠は、シモンに掴まれていた手を引かれて再び彼を見あげた。

「赤くなっているということはわたしの言葉はちゃんと伝わっているのだな。友としてではなく1人の女性としてコマリが好きなのだ。そしてわたしは生涯、コマリ以外の女性を想うことはない」

きゃー、と女の子の悲鳴が上がった。

「生涯って言った、いま！？嘘お、永遠の愛ってやつ！？」

「いいなあ、あんなふうに言われてみたい」

「きゃーん、シモン君って王子様みたい。歯の浮く台詞が似合う」

ならいますぐ立場を代わってくださいいつ。

平穩、安定、堅実がモットーなのになんでこんなに目立つちゃってるの。

それにこれ、きっとまたミネ先輩の耳に入る。

今晚の打ち上げでせっかく先輩に少し近づけるかもって思ってたの

にまた誤解されるじゃない。

ますます頬を赤くした小鞠は思わずシモンの手を振り払っていた。真っ赤になる頬を両手を押さえ彼を睨む。目があつて自分を見つめる青い瞳が優しく微笑んだ。

う、そんなキラキラの王子様スマイルなんて……目に毒じゃないか
あああ。

(わーん、わたしの馬鹿。ときめいてどうするっ！)

だってだって男の人に免疫ないんです。
つきあつたことないんです。

こんな格好いい人に好きだって言われてときどきしないほど男慣れしてないんですっ。

ああだけどっ。

これじゃあ好きな人がいるのに他の男の人にもときめく不埒者になつちやうじゃないか。

乙女の純情ってなんて浮気者。

こんなんじゃミネ先輩に嫌われる。

ちくしよう、シモンめ。

無駄にいい男すぎるのがいけないんだ。

「シモンのバカあ〜」

もう全部シモンのせいにしちゃえと混乱した小鞠は叫んで、そのまま逃げるようにその場を走り去っていた。

「コマリっ」

が、後ろからシモンの声がする。
振り返ってぎよっとした。

「ちよ……なんで追っかけてくるんですか!？」

「コマリが逃げるからだろう」

「そりゃ逃げますっ。あんな人前で告白なんかしてえ。もー、恥ずかしすぎるう。今度のゼミ行きたくなーい。馬鹿シモン。わたしの平穏な生活を返せえ!……ていうか、ついてこないでよ」

大学祭で人が多いためいろんな人間に阻まれてシモンは小鞠に追いつけないようだ。

このまま人に紛れて逃げられないだろうかと、彼女はちよろちよると人の間を縫って走る。

「コマリを一人にできない。危険だ」

「学内に車なんて来ないったら。いいから一人に　　っあ!」

ゴツとなにかに躓いて小鞠は前につんのめった。

転ぶと思った瞬間、脇を通り過ぎた誰かに体を支えられ、地にスライディングは免れた。

「気いつけて」

耳に届いた声に顔をあげたときには声の主は彼女に背を向けていた。そしてすぐに人に紛れてわからなくなってしまう。

(誰?いまの)

男の声だった。

支えてくれた腕も男性のものだ。

小鞠はそこで肩をつかまれ強引に体の向きを変えられていた。

「コマリ、いま転びかけてなかったか？」

「え？あ、うん。石に躓いて……でも助けてくれた人が あれ？石がない」

おかしいなあ、けっこう衝撃があったからかなり大きい石に躓いた
と思ったんだけど。

（もしかして誰かの足だったとか？）

首を傾げる小鞠にシモンは眉を寄せる。

「コマリは昨日も駅の階段から落ちかけただろう」

そうなのだ。

昨日、階段のてっぺんからまっさかさまのところをシモンに抱きと
められた。

彼が助けってくれなかったら大怪我をしていたところだ。

自分を受け止めてくれたシモンの胸の中は広く、腕だって逞しかっ
た。

（ってなに思い出してんの？わたしってやらしい……）

小鞠は我に返って首を振る。

「わたしの注意力が散漫だって言いたいんですか？そりゃあちよっ
とはそういうところがあるかもだけど、今日のはシモンが追って
くるから慌てたんです。昨日のは誰かにぶつかっちゃったみたいだか

ら、その人を巻き添えにしなくてよかったと思っ てえ!？」

突然シモンに強く抱きしめられたため小鞠は息をつめながら声をあげた。

「な、なにになにに？シモン!？やめて」

周りの人が見えます。

振り返ってまで見てる人もいるからっ。

「コマリ、わたしの側を離れないでくれ」

「は？」

「怪我をするかもしれない」

「だから注意力散漫なのは改めるようにしますってば。だから」

「コマリが気をつけていても車が突っ込んできたり、物が落ちてきたり……、っ！もしかしてあのときのも」

「あのとき?……って、痛っ。シモン、苦しいから離して」

ぎゅっ、と力が込められて小鞠は身動きが取れなくなった。

(い、息ができない……なに?なんでこんな)

シモンの様子がおかしい気がする。

そこへヘディとオロフが後追ってやってきた。

「シモン様?コマリ様に何か」

「転びかけただけです。お願い、シモンを引き離してください。息が……苦しいっ」

従者二人に小鞠が訴えるとやっとシモンが彼女を抱く腕を離した。

「すまない、コマリ。つい力が入ってしまった」

「次はもっと優しくお願いします……って、違う！次はこんなことしたらセクハラで訴えますからねっ」

うっかり何を言ってしまったってんだ、この口は。

「気をつける」と頷くシモンは笑っていたけれど、小鞠はその表情に違和感を感じた。

なにかいつもと違う気がする。

「シモン？何？」

「え？」

「なんだか変だから……うん、変。そうよ、いきなり告白してきたりとかも。なんか、いつもと違うでしょう？何かあったの？」

小鞠の言葉を受けて彼はすぐに優しく微笑んだ。

「わたしの気持ちをコマリに伝えておきたかっただけだ。はっきり言ったことはなかったから。約束の期限まで半分以上過ぎていると今更なことに気づいて少し焦ったのだ。残りの期間はコマリにもっと気持ちを伝えていこうと思う」

そう言っつてシモンは小鞠の手を取り指先に口づける仕草をする。

ひ、と彼女は引きつって一歩退いた。

そんな彼女に向かって彼は王子様らしく素晴らしく素敵な笑顔を向けた。

「心は既にあなたに捕らわれ、わたしはあなたの虜です　　コマリ、

わが姫。心からの愛をあなたに」

胸に手をあて優雅に礼をとる姿も様になる。

(きゃあああ！なにこれえー、この人本当に王子様みたい！！つて王子様だけど〜〜)

悶絶しそうな小鞠はさらに数歩後退った。

どうしてこんなに素敵な人が自分に愛を告げるのだろう。これはもう人生の罨としか思えない。

(その気になったらあとでこっぴどく振られるとか、遊ばれて終わりとか うん、きつとそう。庶民のわたしが異世界の王子様となんてあるわけない！ないないっ)

どつくん、どつくん暴れる胸を落ち着かせるように、シモンから視線をそらして小鞠は歩き出す。

その背後にシモンたちがついてくるのがわかったが隣に並ぶことはしなかった。

先ほどシモンについてこないでと言ったためだろうか。

(でもこれ、逆に周りの目を引いてるような)

すこぶる見栄えのいい大型犬3匹がついてくるほうがまだましなのに。

いつそ3人とも犬になってくれないかなあと、小鞠は無理なことを願いながら溜め息を吐いた。

目の前を歩くコマリに聞かれないようシモンは声を潜め従者二人に切り出した。

「コマリが狙われているのかもしれない」

自分を挟むように歩く二人が一瞬、顔色を変えたのがわかった。

「それはもしや……」

「リクハルドの言っていた魔法石を盗んだ輩のことですか？」

「カツレラで何か起こっている様子もないし、わたしに仕掛けてくることもなかったから、盗人は上質の魔法石でより自分の魔力を増幅するためか、それとも高値で売買される魔法石を売った金がほしかったのだらうと思っていた。だが」

「先ほど何があったのですか？」

赤みを帯びた茶色の目を細めてオロフが尋ねてきたため、シモンはコマリの背中を見つめた。

昨日、コマリが駅の階段から落ちかけたのを二人も見ている。

帰宅者の賑わいに自分たち3人が彼女から少し離れてしまったとき、いきなりバランスを崩して階段から足を踏み外したのだ。

「わたしの目の前でいきなり転びかけたのだ。本人は石に躓いたと言っていたがそんなものは見当たらなかった。あの勢いで転んでいれば足はズボンで守られても手や顔を傷つけていただらう」

昨日、今日と立て続けに彼女が怪我をするようなことが起こるのが
おかしい……と思う。

もちろん不幸な偶然が重なってということもあるが、自分は殊にこ
ういう勘はよく当たるのだ。

もしかするとカツレラ王国内に、愛魂の片割れとはいえ異世界の女
性を後に迎えるのに難色を示す輩がいて、あちらの世界からコマリ
を狙って仕掛けてきているのではないか。

（であれば、わたしが后を迎えにこちらへ来ていることを知ってい
る人間の仕業？）

王子たる自分の動向を知るのは国の上層部に位置する人間だ。

そのような者ならば魔法石を使ってこの世界に干渉できるほど腕の
良い魔法使いを、お抱えとして側に置いているかもしれない。

だが魔力のない自分では魔法で何かを仕掛けてこられても全くわら
かない。

テデイもオロフも魔力はなく同様だ。

異世界に来るときここがどのような世界かわからぬため、首飾りの
魔法石にいろいろな守護魔法を施してきたが、魂の対となるコマリ
が危険にさらされるとは考えていなかった。

そのため何の用意もしていない。

浅はかであったとシモンは表情を険しくした。

そういえば先ほど転びかけたコマリを支えた者がいたがあれは……。

（スミトのように見えた。が　すぐに人に紛れてしまっってはつき
り顔まで見えなかったな）

あの男、何者だ。

怪我がないようコマリを助けてくれたことはありがたいが、そもそも本当に彼女を助けたのだろうか。

わざとよろけて自分に近づいてきたように、足を引つ掛けるなどでコマリを躓かせ、助けたと見せかけて彼女に近づきっかけを作ったとは考えられないか。

(じゃあ時間をおいてまたコマリの前に現れるかもしれない)

彼は考えるように拳を口元に当てた。

「テデイ、いますぐコマリの部屋に戻ってリクハルドと連絡を取れ。カツレラにしながら魔法でこちらの人間を操ることはできるのか知りたい。それからわたしたちの持つ魔法石と同じだけの守りの魔法をかけた魔法石を急ぎ用意させてくれ。コマリに持ってもらおう」

「コマリ様は贈り物は受け取らないとおっしゃられておられました。魔法石は一見宝石のようにも見えますし、わたしたちのように首飾りのようにしては受け取ってくださらないのではありませんか」

テデイの言葉にシモンがそうだったと顔を顰めていると、オロフが思いついたように言う。

「「ケイタイ」につける飾りに見せかければどうですか？」「すつぷ」は安価なものが多いようですし、コマリ様はいつも「ケイタイ」を持ち歩いているようですからね」

「なるほど、それはいい案だ。オロフ、おまえはこれからわたしとともにコマリの護衛についてくれ。ただしおまえは陰からだ。コマ

りに何かあると気づかせて怖い思いはさせたくない。以前、駅で頭上から物が落ちてきたこともある。四方だけでなく回りすべてに気を配れ」

「あれもコマリ様を狙って　？」

「あれ以来あのような派手なことは起こっていないからなんとも言えない。だがその可能性もあるということだ。あと、妙な男が一人いる。無精髭を生やし、気の抜けた顔で笑う害のなさそうな男だが油断ならない相手だと思う。わたしに接触してきたがコマリにも接触しようとするかもしれない」

スミトの真意がわからないし魔法で操られていないとも限らない。警戒はすべきだろう。

「了解しました。ではわたしは陰にまわります」

オロフは頷いてすぐに人ごみに消える。

騎士団の中でも精鋭の隊長を務めるほどの腕を持つ。

気配を消すくらいいわけなくやってのける男だ。

ただこちらの世界では自分たちの姿は外国に多いらしく、日本では顔立ちや肌の色が違って目立ってしまうため、いつもよりやりにくいだろう。

(変装用の道具を揃えられるように金貨を渡せばよかったか)

いや、だがカツレラの金はそのままでは使えない。

一度コマリとともに換金所らしい場所へ行ったが、金貨を金に換えるには身分証明書が必要らしかった。

もちろん異世界からきた自分たちに身分証明書などあるはずがない。

おかげでシモンは金貨をこちらの世界の金にかえることもできないまま、コマリの世話になりっぱなしという状態だった。

それに彼女が純金の金貨を持っているのを換金所の者がかなり不審な目で見ていた。

「見たこともない金貨だしいろいろ疑うよね。もう売りにいけないかなあ」とコマリがため息混じりに言っていたから、換金所の者に偽物を持ち込むかもしれないと目をつけられたのだろう。

（だがやはりコマリに今日の打ち上げの参加費をもらうのは忍びないな）

シモンの思考がまたそこへ戻りかけたときテデイが彼に呼びかけた。

「シモン様、わたしもこれよりリクハルドと連絡を取りに一旦コマリ様のお部屋に戻ります。それからオロフがコマリ様の護衛につくのであれば、日中マスターキクオの元で働くのは無理ですので、そのことも伝えてまいります」

「ならばテデイ。マスターキクオに給金の一部を前払いしてもらえるか聞いてもらえないか？今晚、打ち上げとやらに参加するには金が必要らしい」

「いかほどでございましょう？」

「おそらくマサキたちがいくらか知っているはずだ」

「では彼らに尋ねてみます」

テデイもまた側を離れていくのを見送りシモンはコマリの隣に並ぶ

べく歩みを速めた。

自分が傍らにいればコマリに危険が迫ったとき、自分に発動する守護魔法で彼女をも守れるはずだ。

「あれ？二人は？」

「わたしがコマリと二人きりがいいと言ったから気をきかせてくれた」

「……あ、そう……ですか」

一呼吸あとのぶつきらぼうな返事は照れているからだろう。

二人きりを喜んでくれないのは残念だが、男慣れしていない反応は初々しくて本当に可愛らしい。

シモンは思わずコマリの肩を抱き寄せたくなったのをなんとか堪える。

不用意に触れるのは彼女に警戒心を抱かせるだけだと思ったのだ。

（わたしを好きになってくれたならそのときは存分に可愛がろう）

この愛しい存在を腕に抱き、余すところなく愛してどうしようもないほど甘やかしたい。

普段、力を抜けないまま懸命に生きている彼女だからこそ、自分の前だけは力を抜いて甘えてほしいとそう思う。

「コマリ」

「なんですか？」

柔らかそうな唇から発せられる、耳に心地よく響く愛らしい声はいつまでも聞いていたい。

見上げてくる目は瞳が大きめでパツチリとしよく見ると黒ではなく濃い茶色をしているのだ。

このどこまでも美しい眼差しが自分だけを見てくれるようになればいいのに。

「わたしはコマリが望んでくれるなら一生隣にいたい。だからどうか、真剣にわたしのことを考えてくれないだろうか？」

沈黙してしまったコマリは困ったような顔になった。

やはり異世界の人間など受け入れ難いのもしれない。

だがこればかりはコマリの気持ちを尊重して、おとなしく異世界に帰ることなどできないのだ。

「シモンはわたしが愛魂の片割れだから好きなだけですよね？」

「それはどういう意味だろうか？」

「え？意味って……だから、愛魂がわたしを示したからわたしを選んだんですよね？愛魂が違う人を示していたらその人を選んだでしょう？」

「そうだな。愛魂が別の女性を示していたらその女性の元へ行ったとは思うが」

「じゃあそれって愛魂が示せば誰でもよくて、別にわたしが好きってわけじゃないんじゃないか、愛魂のせいでわたしを好きって思い込んでるだけじゃないですか？」

コマリの話聞いていたシモンはやっとそこで彼女の言いたいことを理解した。

初めて会ったときも愛魂が選べばなんでもいいのかと尋ねられたが。

（あのときの説明では不十分だったか。未だに気にしていたとは）

どういえばこの気持ちがうまくコマリに伝わるだろう。

「確かにわたしたちカツレラ王国の王族は、魂の片割れに出会うと相手に好感を持つ。というか持ってしまうのだと思う。自分の魂と引き合う相手とは相性がいいとわかっているからだ。だがいくら相性がよく伴侶となるとうまくいくとはいえ、互いの努力なくしてそれはありえない。現にわたしの両親は魂の対となる夫婦だが、喧嘩もするしどうやら過去に離婚の危機もあつたらしい」

「え!？」

「それに魂の片割れに出会えなかったり相手を亡くした先祖も過去にはいた。そういう者は別の相手と結婚している。愛魂の示す相手が絶対というわけではないんだ」

「そう、なの？」

「そうだ。だが魂の対となる相手がかかるこの能力を持っていれば、会ってみたいと誰だっと思うだろう？わたしはその思いが人一倍強かった。なんの確証もないが、昔から自分の半身となる相手をきつと心から愛するだろうと、盲目的に思っていたのだ。おかげで弟妹や従兄弟に、それは幻想だ夢だと散々言われた。相手は理想の塊でもなんでもなく、自分と相性がいいだけだから現実を知ったらがっかりすると……彼らの愛魂の片割れは同じ世界にいて、皆、既に出会っていたからああ言ったのだらうな」

「それ、正しいと思います。だってわたしはただの人 庶民ですよ。王子様のお相手ができるような人間じゃありません」

まるで目を覚ませといわんばかりのコマリの口ぶりがおかしくてシモンは笑っていた。

「けれど彼らは文句を言いつつも相手に出会えて楽しそうだった。わたしにはそれが羨ましかったのだ。そんなわたしもやっとコマリを見つけた。そして盲目的な思いは確証を得たのだ。わたしはこの先にながらうとコマリを愛してやまないだろうと」

「だからそれは思い込みだって」

「魂の対であるコマリに最初から好感を持っていたことは認める。それを思い込みと言うのならそれでもいい。けれどコマリの優しさや思いやりを知ってさらに好きになった。わたしのことを迷惑に思っているだろうに面倒をみてくれて、わたしに腹を立てて怒っても突き放したりしない。コマリが時おり笑ってくれるその顔がどれほどわたしを嬉しくさせるか。拗ねたり照れたりする顔までもがどれほど可愛いか。わたしの心に育ったコマリを想うこの気持ちまでは、どうか思い込みと否定しないでほしい」

シモンが「コマリ」と呼びかけると彼女はビクリと肩を震わせた。顔が真っ赤になっているがこれはどういうわけだろう。が、すぐに思い当たった。

(また照れているのだな)

その証拠に今度はこちらを向きもしない。言葉を飲み込むコマリは態度や表情に気持ちが表れるようだと気づいてから、随分と彼女の考えを察せられるようになったと思う。シモンはもう一度優しく彼女の名を呼んだ。

「コマリ　人を好きになるきっかけなど些細なことがほとんどだと思う。わたしの場合はそれが愛魂だったというだけのことだ。コマリがソウを好きになったきっかけも、きっと他愛ないことだった

だろう？」

「なんでミネ先輩のことっ」

すぐに口をおさえたコマリはそれでもチラとこちらを見上げてきた。

「コマリがいまはソウを好きでもいつかわたしを見てくれるようになるまで側にいたい。　　が、わたしも長くカツレラ王国を離れるわけにはいかないのだ。コマリが決めた一ヶ月はちよつど良い期間だろう。だから残りの日数、コマリに気持ちを伝え続けることを許してくれ。そのくらいしかわたしにはできないのだから」

彼女がまた困ったような顔になった。

いや、違う。

申し訳なさそうな顔だろうか。

（わたしの気持ちに伝えられないから？）

本当にコマリはいつも人のことばかりだ。

そんなことは気にしなくていいのに。

今後、コマリの気持ちが大きく変化して、自分を見てくれるようになるかもしれないではないか。

「わたしはコマリを諦めているわけではない。むしろやる気になっている。どうやってコマリをわたしの虜としようかってね」

「と、りこって　　いっつも恥ずかしげもなくそういつこと言っんだからっ」

コマリはフイとそっぽを向いた。

やはり拗ねてしまつ仕草まで可愛らしい。

シモンは風に揺れる黒髪に触れたくて彼女の頭を撫でた。艶やかで柔らかな髪はまるで絹糸のようだ。

コマリは驚いたようにこちらを凝視している。

いままでこんなふうに触れたことはなかったから当然だろう。

あまり過度な接触は彼女を怯えさせるとシモンは名残り惜しげに髪から手を離れた。

「約束の一ヶ月後にコマリの偽りない気持ちを教えてほしい」

「……わかりました」

戸惑つたような彼女の返事にシモンはにっこり微笑んで手をさした。

「手、がなんですか？」

「祭を見てまわる間、手を繋ぎたい」

「い……やですっ！」

「どうして？腕を組んでほしいとは言っていないのに」

「それはもつと嫌です。できませんっ。絶対無理っっっ」

「もしかして恥ずかしい？」

うぐ、とコマリが黙り込みシモンを睨みあげた。

しまった。

凶星を指して怒らせてしまったか。

「シモンの馬鹿っ！そういうデリカシーのないところ大っ嫌い！！」

ああ本当に、自分は相当彼女にまいつている。

怒られてもコマリがどうしようもなく可愛く見えるのだから。

大嫌いと言われているのにニコニコと笑うシモンに、コマリは余計に口を尖らせた。

「もう知らない」と歩き出す彼女を追って歩くシモンの後ろ姿はどこまでも楽しそうだった。

* * *

薄暗い部屋の中、ベルベットのクッションの上に置かれた水晶に黒髪の女の姿が映る。

髪によく似た瞳と象牙色とも真珠色ともつかない不思議な色をした白い肌もち、顔立ちもどこかこちらの人間と違う。

それはそうだ。

この女は異世界に住むのだから。

黒い地面や澱んだ空に鉄の塊が走り、天をつくほどの石の建物がひしめき合って夜でも明るいそこは、おそらく悪魔たちの住む世界だろう。

シモン様は愛魂の導きでそんな恐ろしい世界へ行ったが、きっとこの人型をした悪魔に惑わされておいでなのだ。

早く目を覚まさせてさしあげなくては。

女は悪魔とはいえ下等であるらしい。

それとも男をたぶらかす術に長けているだけなのか自分の魔法に気づく気配もない。

「……っ……はぁ」

唇から苦しげな息が漏れ、ポタリ、と冷や汗が水晶の側に滴り落ちた。

異世界に向けて魔法を行使するのはかなりの体力と魔力が必要だ。一度、異世界の物を破壊するほどの魔法を使ったら、数日起き上がれなくなってしまった。

やはり上質の魔法石が一つきりでは屑同然であれば、魔力増幅も不十分で仕方のないことだろう。

だが女を始末するために自分が弱って死ぬわけにはいかない。

シモン様がこちらにお戻りになった後まで見届けなくてはならないのだから。

おかげでいまは子ども騙しのような魔法で女を消そうと試みてはいるが、それでも体にこうまで負担がある。

しかも狙ったとおりにいかないのが腹立たしい。

震える手で痛む胸を押さえた。

前髪の間から陰鬱で澱んだ茶色の瞳が水晶を見つめる。

「消える……」

おまえなどシモン様にふさわしくない。

水晶に金色の光を纏ったかのような金髪の男が映った。

「シモン様……悪魔は必ずや葬ってさしあげます」

ツと指先が水晶を撫ぜる。

だがすぐに水晶の中が揺らぎ姿が消えた。

ああ、水晶で異世界を覗くだけでも力が抜けていく。

椅子の背にもたれ天井を仰いで大きく深呼吸を繰り返した。

もっと体力のある人間なら強力な魔法を使っても耐えられただろうに。

シモン様と同じ男であるのになんと情けないことだ。

窓に風があたり窓際にあったランプの明かりが揺らぐ。

同時に男の影も大きく動いてまるで生き物のように蠢いた。

居酒屋に楽しげな声が響く。

だがその声は酒によってかなりボリュームが大きくそしてノリが軽い。

一人が店員に向かって手を上げたたたん次々に手が上がった。

「ハイ、そこのかっわいいおねえさん！生ビールおかわりい」

「あ、わたし芋焼酎う、この「下戸」ってのがいいい〜」

「俺、「竜王」。ポン酒だとこれが最高」

ああ、皆けっこう壊れてる。

ていつかうちのゼミ、お酒に強い人多いからなあ。

いくら飲み放題とはいえ浴びるように飲むのはやめたほうが……。小鞠は周りを窺いふと目を留めた。

「シモン、おつまえつつよいなあ！俺とはるなんて相当だぞ〜」

「そうか？わたしはそう強い方ではないのだが……おそらくアルコール度数が弱いからだろう。それにしてもタクト、この日本酒というのはうまいな。わたしは「竜王」よりこの「一古路」というものの方が辛口でいい」

おまえもか、シモンっ！

さっきからいったい何杯日本酒を飲んでやがりますか。

しかも全く顔に出てないじゃないか。

（でも本当に強いのかなあ。帰り道でフラフラになんないでよ？）

そして臯月満留。

「シモン君ってお酒好きなんだあ。わたしもそれ一口ちよおだい？」
さつきからやたらとシモンにベタベタしていますが。

(ミネ先輩狙いじゃなかったの？よくわかんないなあ、彼女)

皐月さんに可愛らしく小首を傾げてちようだいされれば、さすがのシモンもイチコロ……あれ、お酒あげませんよ。

というかあげたくないのか一気飲みしちゃいましたよ。

こどもですか、あなたは。

しかも「随分と酔っているようだからこれ以上飲まないほうがいい」と諭しています。

あれだけ飲んで頭は冷静なんだ、すごいな。

しかし皐月さんってば拗ねた顔もきゅるんとして女の子っぽいなあ。周りの男の鼻の下がありえないくらい伸びてる。

酒にそう強くないコマリはシモンと満留を観察しながら、テーブルの料理を手当たり次第にパクついて、う、と顔を顰めた。

かっらーい。

これ激辛キムチじゃない。

誰よ、こんなの頼んだのお。

涙目で小鞠はウーロン茶に手をのばし一気に煽る。

(あ、れ？これ待って お酒？なんで！？ウーロン茶頼んだのに)

ウーロンハイになってますけど。

小鞠が気づいた時には遅かった。
コップの半分以上を飲んでしまっている。

「ええ？コマ、なにわたしのウーロンハイとってんのぉ？あ、わたしがあ間違ってたのかぁ。はい、コマのはこっちい。返すねっ」

いえ、返すねってそんな可愛く今更ウーロン茶を手渡されてもね。

（やっばい。思い切り飲んじゃった。たぶん、許容量超えた気がする）

小鞠は一定量を超えた飲酒をするといきなり酔っ払うという変な体質だった。

いつも飲み会ではその限界を見極めて飲んでいたのに。

（だめ！だめだめだめ。今日のわたしにはミネ先輩をフォローするという大事な役目があるんだから）

こうなったらウーロン茶をがぶ飲みしてアルコールを薄めてしまおう。

小鞠は手にしているウーロン茶を勢いよく飲んだ。

うっ、おなかがちゃぶちゃぶになる。

「コマ、えらくいい飲みっぷりだけど喉渴いてるの？」

トイレにたった友達と入れ替わるように空いた席に座ってきたのは爽だった。

打ち上げが始まった時は近くに座っていたのだが、宴も酣になるに従いみんなの席が入り乱れて、離れてしまっていたのだ。

「ミネ先輩。いえ、ちょっと激辛キムチを食べてしまって。わたし辛いのは苦手なんです」

「そっか。それで涙目になったんだ。うるうるして可愛いね」

か、かかか可愛いと言ってくれましたか、いま。しかもそんな笑顔つき。

(可愛いのはミネ先輩ですっ！やっぱりかっこ可愛い)

ニヤつきそんな頬をおさえる小鞠は、

「ところでコマ」

爽が声を潜めて顔を近づけてきたため、どぎまぎしながら耳を傾ける。

「そろそろここはお開きになるだろ？俺、2次会行きたかったけどやっぱちよつと無理っぼくてさ。足に来てんだよね。悪いけどコマ一緒に帰ってくれないかな？」

「い、一緒に？」

ミネ先輩と一緒に帰れるんですか。

あ、でも先輩、電車は何線なんだろう。

「駅まででいいんだけど。そっから電車乗って帰れると思うし」
「お供します」

「ありがとう。やっぱコマは頼りになる。あ、でもまさか彼一緒についてこないよな？」

爽に指でシモンを示され小鞠は「ついてこない」と言い切れなくて黙り込んだ。

(どうにか撒いてみようかな)

けれどシモンは愛魂でいつも自分がどこにいるか探し当ててしまう。

「満留があのまま彼にくっついてくれてるといいんだけど」

あ、その手があったか。

皐月さん、どうかシモンへばりついていてください。

「それともコマ、彼に満留がくっついてるのが不満？」

「はい？」

「だってさつきじーっと二人のこと見つめてたからさ」

「ああ、それはシモンがお酒に強いなあって思って」

「それだけ？」

他に何かあるというのか。

爽の言いたいことがよくわからなくて小鞠はきょとんと彼を見た。

「そろそろここはお開きの時間でえーす！2次会カラオケっ。その次は小腹がすくからラーメン？はい、行くやつ表に集合」。帰るやつも表から帰る」

酔っ払っているらしい幹事の一人が手を打って注意を引きそう皆に告げる。

「コマ、満留があいつにくっついてるうちにだよ」

爽が小鞠の手を引く。

「えっ、ちょ……ミネ先輩」

なんとかカバンと上着を掴んで爽についていく彼女は、一瞬シモンを振り返った。

が、彼は満留に組まれた腕を振りほどくのに気をとられているのか、こちらの様子に気づくこともない。これなら撒く手間も省けるだろう。

（お金も持つてるみたいだし電車の乗り方も覚えたシモンなら一人で家に帰れるよね？）

いや今から駅に向かうのだから先輩が電車に乗るのを見届けたあと、駅でシモンを待ってあげればいいのではないか。きっと愛魂を頼りに追いかけてくるはずだから。

そう思った小鞠はシモンから爽へと目を向けた。

彼に手をつながれるなんて初めてだ。

彼女の顔に嬉しそうな笑顔が浮かぶ。

シモンが気づいた時にはコマリは店からいなくなっていた。どれだけ引き剥がしても腕を絡めてくるミチルが微笑んで彼を見上げる。

「ミネ先輩もいないしい、二人で抜けたんじゃない？」

彼女の言葉を受けて周りの者が情報をくれた。

「あー、そっぴやミネ先輩ちよつと具合悪いって言ってたぞ。気づいた佐原が送ってたんじゃね？」

「コマちゃんってなんだかんだいいつつ世話焼きなんだよねえ。優しいの」

確かにコマリはとても優しい。

だからソウの具合が悪いなら付き添うくらいはするだろう。

(オロフが護衛についているはずだから大丈夫か)

二人が消えてそう時間が経っていないだろうからいまから後を追えば追いつける。

突然、ぐい、と強く腕を引っばられシモンはミチルに目を向けた。

「ねえ、シモン君。わたしたちも抜けない？」

小さな声でそう言われたあと、腕に胸を押しつけられてシモンは思わず彼女を凝視していた。

視線が合うと意味ありげにふふと笑う。

自分もそこまで鈍い男ではない。

誘われているのだとわかった。

(思った以上に積極的なタイプだな。いや、酒が入っているせいもあるか)

性欲を満たすためだけに相手をするのもいいだろう。

が、それはこれまでの自分ならばの話だ。

もうコマリと出会ってしまった。

他の女をほしいと思わない。

「すまない、ミチル。わたしはコマリしか見えていないのだ」

シモンはやりわりと腕を引き離し、ムっとした顔になるミチルに言う。

「それにミチルはわたしを好きなわけではないだろう？」

その瞬間、彼女から小さく舌打ち交じりの声が聞こえた気がした。

「うっせ」

空耳か？と思うシモンに向かってミチルは変わらない笑顔をみせる。

「もうシモン君では真面目なんだから。わたしはもっとシモン君と仲良くなりたいなあと思って思ってるのにい」

「そうか。ではまた後日、場を設けることで許してもらえないだろうか。ゼミの後の教室ではどうだろう。なにぶんわたしは金を持っていないものでな」

「えっ嘘！？シモン君、いろんな服持ってたりするじゃない」

「ああ、それはアルバイト先の親切な客が　おそらく同じ服ばかりで見かねてのことだろうな。兄弟のお古だから気にするなと言ってくるのだ」

コマリは「ブランド物のお古なんてある？」と呆れ顔だったが、シモンは日本には親切な者が多いと思っっている。

「ええー？……バイト、してたの？じゃ、じゃあいま着てる服とか持ち物って」

「これか？上着は今言ったように客からもらったもので他はスーパ
ーで買ったのだ」

「スーパー！？信じらんないっ」

「本当だ。こちらの服がないわたしにコマリが買ってくれた」

コマリがくれた物だからとつい大切にしてい、最近はもらい物ばかり
着ていたらなんだか彼女の機嫌を損ねてしまった。

今日、この服を着たらコマリの機嫌は直った気がするが。

「服がないってどんだけ貧乏よ……ありえない。金持ちの道楽で日
本に来てるんじゃないの？」

ぶつぶつと呟くミチルにシモンは律儀に答える。

「いや、こちらに来てすぐに一文無しになったが？だからいまもコ
マリに世話になっている」

コマリの抱えた借金の返済に、持っていた金貨や剣は充ててしまっ
たし、後から送金してもらった金貨も身分証がなく換金できないた
め、電車賃や昼食代など彼女に負担をかけたばなしだ。

ミチルが顔を引きつらせウフフと愛想笑いを浮かべながら後退った。

「そ、そうなんだ。コマちゃんってほんと物好……優しいよねえ」

「ああ、コマリは誰よりも優しい女性だ」

「そう、だからシモン君ってコマちゃんに一途なんだあ。うん、
わかった。わたし、シモン君のこと応援する！その気持ちに打たれ
ちゃった。頑張ってるっ！！」

ミチルが消えたのと入れ替わりにシモンの肩を叩く者があった。

振り返るとマサキたちが首を振っている。

「いやあ臍月って実は遊んでくれちゃう女だったのか。こりゃ新発
見。喜ぶ男多そうだな」

「馬鹿じゃん、シモン。なに自分から貧乏人だって暴露してんだよ。

あれじゃ女は引くわ〜」

ユウタがシモンの首に腕をかけて引っぱり声を潜めた。

「誘いを受けりゃよかったのに。俺たちなら佐原に黙っててやったぞ?」

マサキとタクトもうんうんと頷く。

「わたしはコマリ以外いらないのだ」

シモンの返答に彼らは「やっぱなあ」と呆れ顔の中にも笑みを浮かべた。

そのまま3人に店の外に連れ出されると背中を押される。

「んじゃ佐原のこと追っかける」

「駅わかるか?あっちだぞ。走れば間に合うんじゃね?」

「佐原のことだからミネ先輩んちまで送ってったりしそっだし、そうだったら先輩も男だからわかんねえぞ?つれこまれっかも〜」

タクトの言葉に顔色を変えて駆け出すシモンの後方で、「じゃーなあ」と3人の声が聞こえた。

彼は意識を集中して愛魂が示す方角を探る。

本当なら胸から取り出した愛魂が流れていくのを追うほうが確実に、こちらの世界では目立つことをするなとコマリに厳命されていた。

(電車に乗られてはどこへ向かったか探すのが困難に　ん、こっちか)

駅の方向とは違うがこれはどういうわけだろう。

近道なのかもしれないとシモンは速度を上げる。

腕を組む男女を追い越し周りにチラリと目を走らせた。

リクハルドに首飾りの機能を増やしてもらい、こちらの文字を読めるようにしてもらったが、休憩や一泊と書かれた看板がある。

(宿屋街か?)

そう思ったシモンだがあることに思い当たって足が止まる。

これはカツレラで言うところの花摘み宿のことではないだろうか。

(ではここは花街か?にしては花売りや揚屋などが見当たらないが) 日本は花摘み宿ばかりを集めてあるのかもしれない。

いやそんなことよりコマリはソウとこの中のどこかに……。

その想像だけでシモンは自分の血が沸騰するのを感じた。拳を握り締めたせいで爪が掌に食い込む。

「シモン様」

聞き覚えのある声にシモンは弾かれたようにそちらを向いた。

オロフが駆け寄ってくる。

「オロフっ、コマリはどこだ!？」

「申し訳ございません。シモン様に伺った怪しい男を似にた人物を見かけて、そちらに気をとられている隙にコマリ様を見失ってしまいました」

「なっ……」

「おそらくはこの辺りのどこかの宿に 男のほう気分が悪いとコマリ様をこちらに誘導してありましたから」

深く頭を下げてのオロフの言葉にシモンは焦って周りを見渡した。

こちらの世界の建物はたいてい二階以上ある。

しかも日本の花摘み宿はカツレラと比べても大きく階数もかなりあるようだ。

「一つ一つを当たってゆくわけにもゆかぬな」

いっそ愛魂を出して流れていくのを追うべきか。

このような緊急事態であるならばコマリも許してくれるだろう。

(いや、コマリはソウを好きなのだ。望んでソウについていったの

では?)

ならば自分は両想いの二人の邪魔をしているだけだ。だからすこすこと引き下がるのか?

コマリの柔肌にも他の男が触れるとわかっていて?

シモンは更に拳を握り締めた。

(例えコマリが望んでいるのだとしてもわたし以外の人間となど絶対に嫌だ!!)

シモンが顔をあげたところでききなり足元が大きな音を立てて弾けた。

「シモン様っ!」

オロフがシモンを庇うように覆いかぶさるのと同時に二人の首飾りの守護魔法が発動した。

シモンとオロフの周りにまるで見えない壁でもあるように、黒い地が裂けて弾け飛んできた礫が阻まれる。

「シモン様、お怪我は?」

「大事無い。えらく頑丈な魔法壁だな。こんな間近で爆発が起きてもびくともしなかつた」

「大砲を撃った音はしませんでしたが」

「大砲などではない」

言いながらシモンは前方を睨みつけた。

オロフもすぐにシモンの視線を追い、

「シモン様。お逃げください」

彼を背に庇いながら前に進み出る。

声が届かないほど離れた距離にスミトがいた。

昼間と同じ服装で今はパーカーのフードを被っている。

スミトはシモンたちに笑顔を向けると側にある建物を指差してからくるりと背を向けた。

「オロフ、奴を追え」

「ですがシモン様をお一人にするわけには……」

「いいから行け。それにここには騒ぎに巻き込まれる」

周りでは「なに、今の」。ガス爆発？」と人が集まり始めている。

それを横目で確認したシモンは声を潜めた。

「奴がコマリを狙っているかもしれない。この騒ぎはわたしたちをコマリから引き離すためかもしれないだろう。だからわたしは彼女を探す。オロフは奴を捕まえる。ただし深追いはしないでいい。おまえの身の安全を優先しろ。なにしろあいつは」

シモンはゆったりとした足取りで歩くスミトの背をきつく見据える。

「魔法使いのようだからな」

店を出て爽と二人で駅に向かって歩くうち小鞠はまずいと思い始めていた。

（最後に飲んだウーロンハイが今頃……うう、ヤバイかもお）
目の前がふわふわしてきている。

自分ではまっすぐ歩いているつもりだったがさっき縁石にぶつかってしまった。

先輩を無事駅まで送り届けるといふ使命があるのにふがない。

「わたしのバカ……」

ぼそりと呟いたところで隣を歩く爽が握る彼女の手を引いた。

「コマ、俺ちよつと気分悪いかも」

「え！？大丈夫ですか？」

「ん、どっか休憩……あつちにそういうのあった気がする」

爽に指さされた方向は駅から少し外れるが、喫茶店かファーストフード店でもあるのかもしれない。

ともかく気分が悪い相手を無理に歩かせ電車で帰らせるのは酷だ。

それにどこかお店に入っているうち自分も酔いが醒めてくるだろう。そう判断して小鞠は頷いた。

「わかりました。歩けますか？」

「なんとか大丈夫。コマもふらついてるみたいだけど……」

「わたしもちよつと足にきてるみたいですよ　けど頭はしっかりしてますから」

「俺は気分悪いだけだからコマ、俺に寄りかかっているといいよ」
いきなり爽に肩を引き寄せられた小鞠は硬直した。

（かかか肩！抱かれてますけどっ）

そのまま歩き出す彼に何も言えないままついていくだけの小鞠は、

もはや周りの状況など目に入っていないかった。

憧れの先輩と手を繋ぐだけじゃなくて肩まで抱かれましたっ。

この状況はいつたいなに!?

まるでカップルみたいじゃないですか。

ていうか手を繋ぐから一足飛びに肩を抱かれるなんてことあるのですかっ。

(もしかしてミネ先輩もわたしのことが好きとか)

いいや、ここは冷静になろう。

乙女な妄想はイタイだけだから。

こんなカッコ可愛い人だったら女の子なんて選り取り見取りだからねっ!

(にしても本格的にお酒が回ってきたかも……なんかぐらぐらしてきた)

歩きながら小鞠は額をおさえる。

小鞠の場合、許容量までの酒ならば少し陽気になる程度で、本格的に酔っても絡むだとか脱ぐだとかいう悪癖はない。

ただ眠くなるのだ。

この事實は成人した折、菊雄と冠奈に飲み連れて行ってもらったときに判明した。

行きつけの店に連れて行ってもらい、案外お酒っておいしいのかなんとか思いながら楽しく時間を過ごしていたはずが、あるところからふつりと記憶がなくなり目が覚めると菊雄と冠奈の家だった。

眠ってしまったのはたまたまかと何度か二人と飲んで、一定量を超えると酔って眠ってしまうことがわかったのだが、それを知った菊雄からは信頼できる人間がない場所では絶対に許容量を超えて飲むなと言われた。

最悪、ヤバイと思った段階で電話をしなきゃいとも。

迎えに行くからと言われていたのだ。

(でもマスター。この状況で電話なんて……ミネ先輩の介抱もさせちゃうことになるし)

どこかお店に入ったら水を飲んで酔いを醒ませばなんとか眠らずにいられるはず。

小鞠は気合を入れて目の前を見据えた。

「コマ、黙っちゃって 歩くのが辛いとか？とりあえずここで休憩してこう」

「え？あ、大丈夫で……す？」

俯いたままだった小鞠は顔をあげて言葉が出なくなった。

目に飛び込んできた文字を理解するのに数秒かかる。

その間に爽に肩を抱かれたまま側にあつた自動ドアの内側に連れ込まれた。

「ちょ……ミネ先輩！？ここって」

「ん？だから休憩できるところ。ベッドあるし横になれるだろ。コマ、まっすぐ歩けないんだし、俺も酔いを醒ましたいしちょうどいいじゃん」

「き、気分が悪いんじゃない」

「だからそれ、酒のせいだと思うし……部屋は これでいつか。お互い酔いを醒ますだけだしね？」

「……はい」

笑顔で爽に言われて小鞠は思わず返事をしてしまった。

(た、確かにここはベッドがあるけれどもっ。だから酔いを醒ますこともできるけれどもっ……でもでも ええ！？)

初めて入る場所に小鞠は動揺とパニックとで思考回路が追いつかない。

逆に爽は慣れた様子で彼女の手を取り奥へと進んでいく。

「あ、あのミネ先輩」

「んー？」

「やっぱりここはちょっと……驚いて酔いも醒めた感じがしますし」

「でもコマはまだ足がおぼつかないみたいだけど？部屋で冷たい物でも飲んで休めばいいよ。ふらふらするコマを歩かせるより俺もそのほうが安心だから」

これは親切心から言ってくれてるのだろう。

（酔いを醒まそうとして……ってことなんだよね？）

後輩の面倒見が良くて、体調が悪いのに大学祭の手伝いまでしてくれるような優しい人だもの。

場所が場所だけに身構えてしまったが、爽を信用しきれない素振りを見せてしまったのは失礼だったと小鞠は思い直す。

「ミネ先輩も休んでくださいね」

部屋の扉を開ける爽は小鞠に向かって微笑んだ。

「コマがいればきつとサイコーに気分がよくなるよ」

室内にはベッドが一つ。

それを見た瞬間、小鞠は固まってしまった。

ここがどんな用途で使われる場所かリアルに感じられたからだ。

「ベッドに横になつたら？俺、タオル濡らしてくるし頭冷やせば？」

「は、はい……っあ、いいえ！ミネ先輩がベッドを使ってください。タオルもわたしが」

爽に声をかけられなければどうしたらいいかわからないまま立ち尽くしていたかもしれない。

「もしかしてコマって初めて？」

「は、ええ！？ミネ先輩、な、何を」

「や、俺はラブホ初めてって聞いたつもりなんだけど　でもふん、いまのでわかった。コマって初めてなんだ？」

くすくすと笑う爽が小鞠の肩に手を回した。

「ひ」と引きつったような声を彼女が漏らすとからかうような笑みを刻む。

「俺が肩を抱くだけで強張っちゃうし。そんなに硬くならなくて大丈夫だから」

覗きこむようにして笑顔を向けられ小鞠は少し遅れて口の端を持ち上げた。

そのまま爽にベッドに座らされる。

「コマ、リラックス。カバン置いて。ほら、ジャケットも脱いじやおう」

「あ、あのミネ先輩。わたし自分で　」

「いいから。じゃ横になって」
思いがけず強い力で両肩を後ろに引き倒された小鞠はベッドに仰向けになっていた。

「だからベッドはミネ先輩が使ってくださいって……っ？先輩？」
起き上がるうとしたはずが爽に押さえつけられてかなわなかった。それどころか相手のしかかかってきたため小鞠は目を見開く。

「ちよ、先輩……や、嘘っ……やだっ」

「なんで？コマ、俺のこと好きなんでしょ？俺もコマが好きだし、だったらこうなるのって自然だよ。　ね？」

爽に「好き」と言われて小鞠は動きを止めた。

「好……き？」

そんな彼女に向かって彼は微笑みを浮かべて体を寄せてくる。

「ああ、好きだよ。コマ」

爽の唇が小鞠の唇を奪った。

(う、嘘……わたしミネ先輩とキスしてる)

けれど爽の舌が口腔に入ってきたことでとっさに手を突っぱねた。

「ミ、ネ先……」

「コマ　平気だから。力抜いて」

「先輩、待　っん、む」

わずかに離れたと思った唇はまたしても塞がれ、先ほどよりも強引に舌が差し込まれた。

突っぱねていたはずの手は彼に掴まれてびくともしない。

(なにこれ？なんでこんなことになってるの？)

口腔内で暴れるように蠢いていた舌が小鞠の舌を絡めとって離れた。

「キスの経験もなし、とか？全部まつさらか。いいね、コマ」

そう言った爽が首筋に顔を埋める。

直後を感じるヌルとした感触はなんだろうか。

小鞠は半ば呆然として爽にされるがままだった。

(先輩、わたしのこと好きって……だからこれはいいの？)

自然な流れだと思えばいいのか。

けれど小鞠の頭の中で警鐘が鳴り響く。

何か違う気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8893z/>

あなたの虜

2012年1月11日00時57分発行